林　子平　―志あれば必ず道あり―

江戸時代の終わりごろ、アメリカのペリーが軍艦をしたがえ、突然来航し、日本中が大さわぎになりました。しかし、その六十年も前に、外国の船が攻めこんでくると予言し、そのための備えの必要性を主張した仙台藩士がいました。林子平です。

元文三（一七三八）年、子平は幕府に仕える武士の子として江戸で生まれました。しかし、子平が三歳のころ、父親が職を失い医者であるおじに育てられました。おじの医院を手伝いながら、夢中になって本を読む毎日を過ごしました。子平は、本に書かれていることでわからないことがあると、すぐに調べて解決せずにはいられない子どもでした。ときには、おじやおじの友人を質問ぜめにし、あきれさせるほどでした。

林　子平像（仙台市勾当台公園）

二十歳になった子平は、兄とともに仙台に移り住みました。仙台藩の仕事につくことができたのは兄だけでした。仕事がなかった子平ですが、藩のために尽くしたいと思い、藩を豊かにするための研究に取り組みました。よい政治を行っている藩があれば、遠く九州にまで調べに行くこともありました。仙台藩をよくしたいという情熱は、旅を重ねるごとにますます熱く燃え上がっていきました。子平は研究に研究を重ね、藩の政治がよくなるための案を三度も出しました。その案の中で、自分が先頭に立って藩のために尽くしたいということも書

きました。しかし、藩は仕事をもたない子平の意見など取り入れようとしませんでした。

幸いにも、子平にはたくさんの友人がいました。特に、子平の人柄にほれこんだ工藤平助たちは、温かい手を差しのべ、困っている子平に本や生活用品、ときには旅行の費用まで貸すこともありました。

以前、子平が東北地方を旅していたとき、ロシアが日本をねらっているというわさを耳にし、子平は不安に思っていました。その情報が本当ならば、一大事です。何とかして確かめる方法がないかと考えた末に、長崎の出島に行くことを思いつきました。その当時、出島は日本で唯一オランダや中国との交易が認められていた場所でした。しかし、日本人と外国人が勝手に話をすることは禁じられていました。もしも話していることが幕府に知れてしまったら、罰を受けるかもしれません。それでも、子平は幕府の役人の厳しい目をかいくぐって、ひそかにオランダ商館長のアーレント・フェイトと親しくなりました。そして、フェイトから、

「どうやらロシアは日本、特に蝦夷地（現在の北海道）を自分たちのものにしようとねらっているようだ。」

という話を聞き出すことができました。ひんぱんにロシアの船が、蝦夷地周辺の海に現れていることもわかりました。蝦夷地がうばわれれば、次は間違いなく東北、そして南へと攻めこんでくることが予想されました。子平はうわさが本当であることを知り、大きな衝撃を受けました。

そのころの日本は、それぞれの藩のことしか考えていませんでした。もちろん、子平もそれまで仙台藩のことを中心に考えていました。しかし、このことはもう仙台藩だけの問題ではありません。少しでも早くこの危機を幕府や日本中の藩に知らせる必要があります。子平は地方の武士にすぎず、幕府を動かせる立場ではない自分をくやしく思いながらも、『志あれば必ず道あり』という信念をもって学問を続けました。そして、旅をして人と話してきたことを思い出しながら、今の自分ができることをやりとげようと考えるようになりました。

人柄…その人の品格。よい人物。

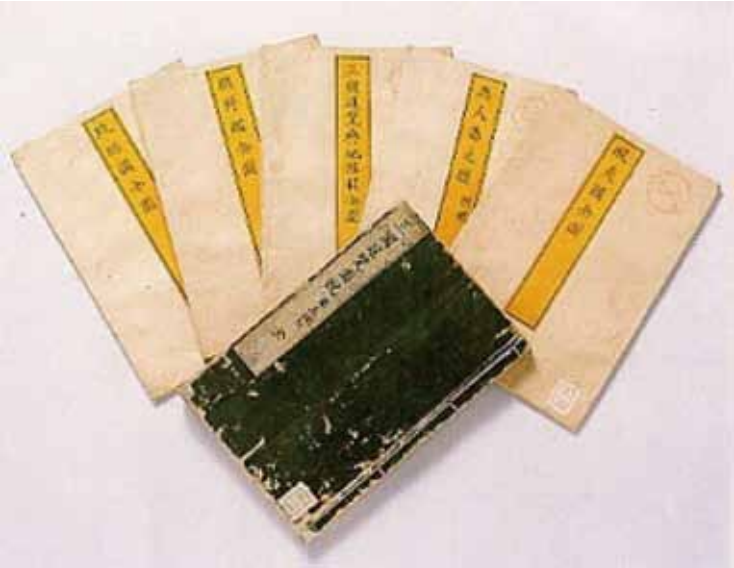
交易…互いに品物を交換し、商いをすること。貿易。

商館長…商いや交易をするための建物を商館といい、その長を商館長という。

子平は長崎から帰ると、寝る間もおしんで本を書き始めました。これまで読んだ本や日本中を旅して集めた情報をもとに築き上げた考えを、『三国通覧図説』と『海国兵談』にすべて注ぎこみました。『三国通覧図説』は、日本の領土や周辺の国々を地図で示したものです。『海国兵談』は、外国から攻めこまれたときどうやって防ぐかをくわしく述べたものです。日本は海に囲まれた島国であり、外国が攻めこんでこようと思えばどこからでも攻めこまれる。すぐに日本の海岸線を守る必要がある。このような日本全体を守ろうとする考えは、当時の日本人にはほとんど思いつかないことでした。

『三国通覧図説』は、五枚の地図と一巻の説明書でしたので、友人に協力してもらい、すぐに出版することができました。しかし、『海国兵談』は、十六巻（半紙三百五十枚分）にもなりました。たくさんのお金が必要となりましたが、これ以上友人に頼むわけにはいきません。しかも幕府の考えについて批判しているように思われる文章があったために、どこの印刷屋も引き受けてはくれませんでした。金もなく、印刷屋にも断られた子平は困り果てた末に、自分で彫って印刷することにしました。当時の印刷は、木版印刷といって、版木に一文字ずつ文字を彫りこんでいく方法で、決して楽な作業ではありません。しかし、子平は自分の手で版木を彫ることを決心しました。自宅の小さな部屋で、少しずつ少しずつていねいに作業を続けました。

約五年の年月をかけて、やっと三十八部印刷することができました。そのとき子平は、すでに五十四歳になっていました。



『三国通覧図説』（仙台市博物館蔵）

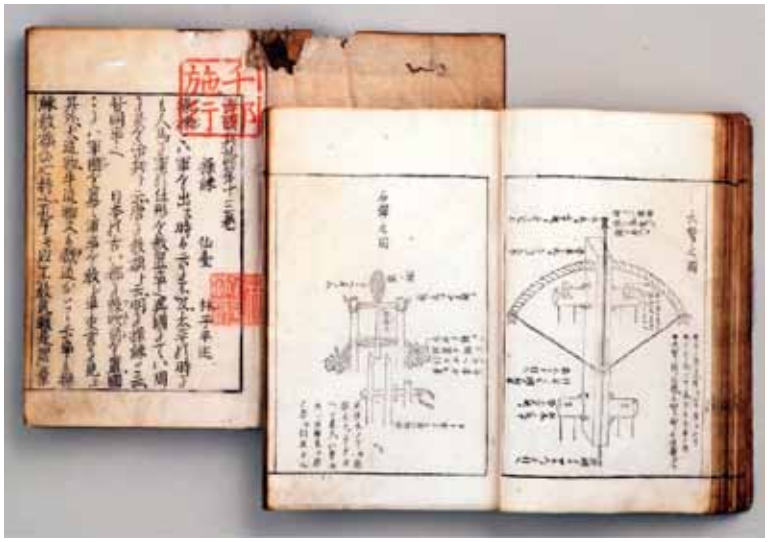
版木…
版を彫るための木。

できあがった本は、これまで助けてくれた友人たちに送りました。そして日本を守ってもらうよう幕府にも送ることにしました。

ところが、さらに印刷を続けようとしたときのことです。子平は、人々の心を不安にし幕府を批判した罪で、幕府にとらえられました。そして、できたばかりの本と版木を取り上げられてしまいました。わずかに残された『三国通覧図説』と『海国兵談』は友人の手によって書き写されて、後の時代に伝わっていきました。

子平がとらえられた次の年（一七九二）年、ロシアのラックスマンが蝦夷地に来航し、幕府に通商を求めてきました。幕府はあわてて子平が唱えていたように、海に面した藩の海岸線を守るよう命令しました。その後、たびたび外国の船が来航し、六十年後のペリーの来航につながっていきました。

日本の将来を考え、日本を守りたいという願いをもち続けた子平は、五十六歳でその生涯を閉じました。しかし、その願いは、やがて新しい日本をつくる人々の心の中で大きく花開いていきました。



『海国兵談』（仙台市博物館蔵）

林子平

林子平は、元文三（一七三八）年に江戸（現在の東京）に生まれ、後に仙台に移り住んだ。子平は日本が鎖国（江戸幕府が日本人の海外外交を禁止し、外交・貿易を制限したもの）中でありながらも長崎や江戸で見聞を広め、日本の海岸線を守る必要性を説く軍事書『海国兵談』を著した。

通商…外国と取引をすること。交易。

青柳文蔵 ― 日本最初の公開図書館をつくる ―

青柳文蔵は、宝暦十一（一七六一）年に現在の岩手県一関市東町松川で、医師の三男として生まれました。父が塾も開いていたので、文蔵は幼いころから書物に親しんでいました。一人で本を読み、字を書き写すことが好きな少年でした。

文蔵が十六歳のとき、父は医者の仕事をつがせるために、登米郡米谷（現在の登米市東和町米谷）の医師のもとに修業に出しました。文蔵は医師のもとで修業にはげんでいましたが、十八歳のとき、（医師の仕事をつがせようとしている父には感謝している。しかし、医師は民衆を思い、慈しみをもたなければならない。技術だけではだめだ。父への恩返しのためにも、もっと勉強しよう）と心にちかい、儒学を学ぼうと江戸に行くことにしました。

江戸に出た文蔵でしたが、お金がないので読みたい本も買えず、思うように勉強することができませんでした。文蔵は、学問をするために江戸の医師のもとで働くことにしました。

しかし、（やはり、医者は民衆を思い、慈しむために『仁』を学ばなければならない。わたしは、人としてどうあるべきかを学ぶ必要がある）と考え、再び儒学を学ぼうと医師としての道を考え直すようになりました。

それからの文蔵は、塾を開いて近所の子どもたちに読み書きを教えたり、農作業を手伝ったりと、いろいろな仕事をしながら細々と生活しました。そのころ江戸では、天候不順や大地震、大火事、火山の噴火など、様々な天災にみまわれただけでなく、飢えでおおぜいの人々が亡くなるなど、世の中が大変不安定になっていました。文蔵は、生き延びるために必死で働きました。極めて貧しい生活を送りながらも、儒学を学ぶ意欲を失わず、少ないながらも得たお金で本を買い、勉強していました。

慈しむ… かわいがる。愛する。

儒学… 中国の孔子がとなえた教えを学ぶ学問。

仁… 思いやり。儒学では、人々が思いやりをもって生活できる社会の実現を目指している。

そんなとき、人生に大きな影響をあたえる本に出合いました。それは、当時の裁判の様子が書かれたもので、百四十四の名判決を集めた『棠陰比事』という中国の本です。

文蔵は、

（何も知らない庶民は訴える方法も知らず、泣きくれている。法律を勉強し、困っている人々の味方になろう）

と決心したのです。

その後、文蔵は公事師（現在の弁護士のような職業）になることを目指して努力を重ね、広く名前を知られるようになりました。文蔵は、公事師としてたくさんの収入を得るようになり、さらに質屋なども営み、大きな富を成したのです。

本を読む青柳文蔵（宮城県図書館蔵）

ときが過ぎ、文蔵は六十九歳になっていました。

これまでずっと文蔵の心にあったのは、江戸にやってくるときの決意でした。

（こうして富を成し、書物に囲まれてはいるが、思うのはふるさとのことである。医業をつがせようとしてくれた父に感謝しているし、残り少ない人生だからこそ、何かふるさとのためになることをしたい）

江戸に来て、貧乏のどん底だった文蔵。読みたい本も買えず、思うように勉強をできなかったころが思い出されます。

そして文蔵は、

（学問への志を抱きながらも達成できない人々に、自分の蔵書を読んでほしい。身分や地位に関係なく、だれでも利用できる、だれでも読むことができる文庫を作りたい。それが、父母、そしてふるさとに対する恩返しである）

と考えました。

当時、自由に書物を読むことができたのは、身分や地位の高いお侍や学者などに限られていました。身分の低い人は、勉強したくても、その願いがかなえられない世の中だったのです。

文蔵が儒学者を志して集めた蔵書は二万余巻にものぼりました。そこで文蔵は、それらの蔵書を集めた文庫（図書館）を作ることを思い立ち、運営基金としての千両（現在の約五千万円）とともに、仙台藩に献上することを願い出たのでした。

その願いはかなえられました。仙台藩から許可がおりたとき、文蔵は自分の志が殿様に通じたと思いました。

仙台城下の百騎丁（現在の東二番丁）に青柳文庫が建てられました。

青柳文庫（宮城県図書館蔵）

そこには、二万五十巻ほどの蔵書がありました。仙台藩は役人を二人置き、貸出帳をつけて管理しました。武士や町民、女性、お坊さんなど身分、性別、年齢に関係なく、多くの人々が青柳文庫を利用したということです。

郷里の松川にある「青柳倉記碑」に、文蔵が書いた文章が残っています。文蔵は、その中で青柳文庫のことにふれて、

「書すなわち吾の賢子孫なり……」

と書いています。この言葉には、書物を読むことで、人として知らなければならないことや人としてしなければならないことがわかる。わたしが残す書物を読んで勉強する人が出てくれば、書物こそがわたしにとって親孝行な子どもたちだ、という文蔵の思いがこめられています。

集めた書物を後世に伝えていきたいという文蔵の願いが、文庫と石碑に残されることになったのです。

献上…
神や身分の高い人に差し出すこと。

青柳文庫は、日本で最初の一般の人々が利用できる図書館といわれています。医学・法律などの専門書や歴史書、詩歌、小説など、幅広い分野の書物が保管され、人々に利用されました。残念ながら青柳文庫の建物は昭和二十（一九四五）年の戦災で焼失してしまいましたが、当時の書物の一部は、今も宮城県図書館や宮城教育大学に保管されています。

青柳文庫の碑（宮城県図書館蔵）

青柳倉記碑（宮城県図書館蔵）

青柳 文蔵

青柳 文蔵は、宝暦十一（一七六一）年、（現在の岩手県一関市）に生まれた。江戸に出て勉学にはげみ、後に公事師（現在の弁護士のような職業）として、大きな富を得た。文蔵は、仙台藩にだれもが利用できる「文庫」の設立を願い出、自分の蔵書や資金を提供した。これは「青柳文庫」と呼ばれ、日本で最初の公開図書館といわれている。

後世…
今から後の世の中。

大槻磐渓 ― 開国を唱えて ―

今から約二百年前、大槻磐渓は、江戸に生まれました。

磐渓の父玄沢は有名な蘭学者で、蘭学を日本に広めるためにはオランダ語を日本語に翻訳するための文章家が必要であると考えていました。磐渓の兄は父の後をついで蘭学者になっていました。しかし、次男である磐渓は父の強い願いから、漢学者の道を歩むことになりました。

八歳になった磐渓は漢文の勉強を本格的に始めました。どんな学問にも積極的な磐渓は、学んだことをどんどん身につけ、十歳のときには他の漢学者が驚くほどの漢文を書くようになっていました。そんなあるとき、父は磐渓に、お世話になっている師匠の家に養子に行くように命じました。当時は父親の命令は絶対でしたが、磐渓は、固く結んでいた口を開くと、

「父上、自分は何か一つの仕事で身を立てたいと考え、漢学を一生懸命に勉強してきました。養子に行くと漢学の勉強が続けられなくなります。このお話だけは父上の命令とはいえしたがえません。どうかお許しください。」

ときっぱりいいました。父はしかりましたが、磐渓は父の命令を聞きませんでした。

その後も磐渓は学問を続け、十七歳のとき、幕府の最高教育機関である昌平坂学問所に入ることができました。そこで十年間、漢学の勉強に打ちこみました。学問を追究するため全国から集まってきた若者ときたえ合う日々でもありました。

このころ全国の沿岸に外国の船がひんぱんに姿を見せるようになっていました。二十七歳になった磐渓は、昌平坂学問所にこもって勉強することだけで世の中の役に立つ人間になれるのか疑問をもつようになっていました。そして、外国の様子はどうなっているのだろうかと考えるようになりました。

外国の様子については、蘭学者の父や兄を通して多少の知識はもっていましたが、もっとくわしく知るために

蘭学…江戸時代の中ごろから、オランダ語によって日本に伝わった西洋の学問。医学や天文学、兵学など。

翻訳…ある国のことばや文章を、ほかの国のことばになおすこと。

漢学…昔の中国の学問や文化などを研究する学問。

長崎に行きたいと思うようになりました。長崎は日本でただ一つ、オランダとの貿易が行われていたからです。磐渓は思い切って父に願い出ました。

「父上と兄上から西洋の進んだ科学について聞いてきました。西洋の様子をもっとくわしく知るために、わたしを長崎に行かせてください。」

「長崎はお前が考えている以上にずっと遠いところだ。お前は江戸で学んでいればよいのだ。」

「父上。私は日本を西洋から守るために、どんな方法があるのか明らかにしたいのです。」

最初は許さなかった父でした。しかし、日本を守るために、漢学だけでなく西洋の事情も追究しようとする磐渓の強い思いを知り、ついに長崎行きを許すことにしました。それでも息子のことを心配した父は、出発のとき、知り合いの学者五十五名への紹介状を磐渓に持たせました。

磐渓は紹介状をにぎりしめ、胸をはり、長崎へ旅立ちました。

磐渓は有名な学者を訪ねながら長崎を目指しました。しかし、その途中で父玄沢が亡くなったために江戸にもどることになりました。そして、翌年、何とか長崎におもむくことができました。長崎では、西洋人が起こした事件のために、オランダ人に直接会うことはできませんでしたが、砲術家である高島秋帆などと出会いました。天保十二（一八四一）年には、高島秋帆が行った、当時最も進んだ軍隊の戦い方である西洋砲術演習を見て興味をもち、磐渓は西洋砲術を学びました。フランスやロシア、アメリカの当時の様子を研究し本にまとめたりもしました。こうして、磐渓は、世界を広い目で見ることができるようになっていったのです。

磐渓が五十三歳のとき、大事件が起きました。黒船が突然神奈川の浦賀に姿を現したのです。鎖国を続けている幕府に開国をせまるために、はるばるアメリカからやってきたのです。仙台藩主は数多くいる藩士の中から、

貿易…外国と品物を売り買いすること。

西洋…ヨーロッパやアメリカの国々。

追究…物事をどこまでも調べて、はっきりさせること。

砲術…大砲をそうさするわざ。

鎖国…国が外国との行ききや、貿易などをしないこと。

西洋の進んだ文明についてくわしい磐渓を選んで浦賀に向かわせました。磐渓は浦賀で、黒船の様子を見届けました。四せきの黒船は今まで日本人のだれも見たことがない軍艦でした。

（あのようなけむりをはいて進む鉄の船に日本が攻められたらひとたまりもない）

次の年も黒船がやってきました。今度は七せきの軍艦でした。磐渓は報告のために、泊まりこんで黒船を写生しました。もっとくわしく調べようと決心した磐渓は、ある晩、飲料水や燃料のまきを運ぶための船で黒船に近づくことに成功しました。

（なんて大きな軍艦だろう。がんじょうな船体は大砲のたまもよせつけないようだ）

そして、磐渓は軍艦の中にいた中国人の通訳と話をすることができました。当時の中国はイギリスとの戦争に負けて植民地にされていました。この中国人通訳は戦争で乱れた中国からにげてきたのでした。

（日本が中国のように植民地にされないためには、もはや開国しかない）

磐渓は仙台藩主だけでなく、幕府に対しても開国が必要であるという意見書を提出しました。この当時、外国人を日本から追い出すべきだと考える人の方が多く、開国をうったえたために命をうばわれる人も出ていました。磐渓の身にも危険が迫っていました。

しかし、磐渓は自分の考えを変えようとはしませんでした。

やがて、幕府は長い間守ってきた鎖国をやめて開国にふみ切りました。ところが、幕府軍と薩摩や長州などの薩長軍との間に戦争が起きました。仙台藩は薩長軍から、幕府に味方した会津藩を攻撃するよう命令されました。仙台藩は幕府軍と薩長軍どちらに味方をしたらよいか決めかねました。藩の重役は、外国の事情にくわしく、知

軍艦…戦いをするためにつくられた船。

植民地…ある国の支配をうけている土地。

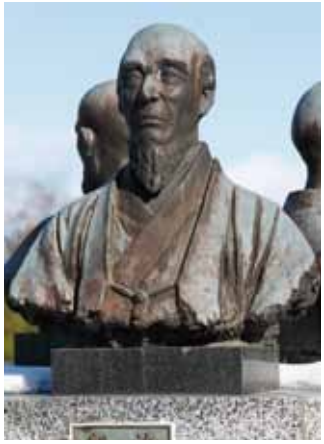
薩摩…昔の国の名前で、今の鹿児島県の西半分にあたる。

長州…昔の国の名前で、今の山口県の西北部にあたる。

識豊かな磐渓に意見を聞きました。磐渓は、

「今、国内で争っている場合ではありません。それに、薩長軍は外国人を追い出せと言っていますが、この考えはまちがいです。幕府が進めた開国は正しかったのです。」

と答えました。仙台藩の重役は磐渓の意見を取り入れて、薩長軍に対して、会津を許し戦争をやめるようにとの手紙を送りました。しかし、この手紙は薩長軍には届きませんでした。やがて、仙台藩や東北の諸藩は薩長軍との戦争に巻きこまれていきました。戊辰戦争です。戊辰戦争は幕府軍の敗戦で終わりました。磐渓は政府にはむかった罪で、牢屋に入れられてしまいました。何人かの役人が戦争の責任を取らされて死刑にされました。磐渓も死を覚悟しながら牢屋で過ごしていました。しかし、翌年、磐渓をしたう多くの弟子のおかげで自由になることができました。



大槻磐渓像（一関市）

明治になると、新政府は、外国の進んだ文明を取り入れて豊かな国づくりを進め、しだいに先進国の仲間入りを果たしていきました。

日本は旧暦から太陽暦に改め、明治六（一八七三）年元日を迎えました。磐渓は多くの学者を自宅に招いて正月の祝いをしました。大槻家では以前から太陽暦で元日を祝う行事を行ってきたのです。

「わが国も、やっと西洋と肩を並べることができた。」

とつぶやくなり、磐渓は目を閉じ、じっと考えていました。このとき、磐渓は七十三歳になっていました。

大槻 磐渓

大槻 磐渓は、享和元（一八〇一）年、江戸（現在の東京都）に生まれた。漢学者で江戸時代終わりの養賢堂（仙台藩の学校）の学頭（現在の学校長）を務めた。磐渓は、西洋の進んだ文明や海軍の強さについて詳しく理解している数少ない人物であった。幕末には、仙台藩主伊達慶邦をはじめ多くの仙台藩士たちにも影響をあたえた。

戊辰戦争…一八六八年から次の年まで行われた新政府軍（薩摩・長州）と旧幕府軍との戦い。

旧暦…昔のこよみ。月のみちかけをもとにして作ったこよみ。

太陽暦…地球が太陽のまわりを一回りするのにかかる時間を一年としてつくったこよみ。一年を三六五日とした現在使っているこよみ。

富田鐵之助 ―日本の製品を世界へ―

富田鐵之助は、天保六（一八三五）年、仙台藩士の富田家の四男として、仙台市で生まれました。鐵之助は十歳のころから漢学のほか、剣道や弓術、馬術などを学んでいました。鐵之助は、そのけいこぶりがとても熱心だったので、どの先生からも感心されました。その後、西洋の鉄砲に関する知識や外国の学問を学んだことで、鐵之助の視野は、世界へと広がり始めました。

鐵之助は二十九歳のとき、当時、江戸幕府の海軍を任されていた勝海舟の塾生になりました。九十人近くいた塾生の中でも、特に優秀だった鐵之助は勝海舟に見こまれて、同じ塾生の高木三郎と二人で、勝海舟の息子で十三歳の子鹿につきそってアメリカへ行き、軍艦の仕組みや戦術について学んでくることになりました。

富田鐵之助（日本銀行蔵）

三人がアメリカに渡り一年が過ぎようとしていたころ、鐵之助の生き方に大きな影響をあたえるできごとがありました。鐵之助のところに、幕府軍が薩摩藩や長州藩の連合軍に敗れたという知らせが入ったのです。鐵之助と高木は悩んだ末に、日本にもどることにしました。

ところが、帰国のあいさつに行った二人に対して、勝海舟は強い口調でいい放ちました。

「君たちをアメリカに行かせたのは何のためか。君たちを留学させたのは、アメリカで勉学と経験

弓術…弓で矢を射る技。

を積ませ、世界的な視野をもって、新しい国づくりにかかわってほしいと願ってのことだ。君たちには、日本の国のあるべき姿や将来のことを考えてほしいのだ。幕府軍が敗れたからといって簡単に帰国してくるなど、考えが浅い。」

二人は勝海舟の国の将来を思う心にふれ、道半ばにして帰国したことをはずかしく思いました。次の日も勝海舟から今後の日本の進むべき道などについて話を聞きました。そして、もう一度アメリカに留学するチャンスをもらいました。鐵之助も高木も迷うことなく、アメリカにもどることにしました。その時、勝海舟は鐵之助の手をぎゅっとにぎりしめました。鐵之助は、思わず強くにぎり返しました。

鐵之助は再び、アメリカに向かうことになりました。そして、船の中で何をなすべきかひたすら考えました。まず英語を身につけることにしました。前回のアメリカ生活で、語学の勉強が欠かせないと感じていたからでした。鐵之助は身につけた英語を生かして、いろいろなことを勉強しました。特に、アメリカの歴史に興味をもちました。先進国であるアメリカの歴史から、日本の将来のあるべき姿について、ヒントを得ることができると考えたからでした。くわしく調べているうちに、鐵之助は、商業や経済の発展によって、アメリカの国民生活が向上してきたことに気づきました。すると、鐵之助は迷うことなく、商業学校に入学しました。日本の将来のために、アメリカに留学させてくれた勝海舟の期待にこたえるためにも、寝る間をおしんで一生懸命勉強しました。日本の商業や経済がアメリカなどの先進国に肩を並べるにはどうすればよいのか考えていると、

先進国…経済や文化などの面で、進歩している国。

いつしか朝になっていることもありました。

そんな鐵之助に、再びチャンスがやってきました。明治五（一八七二）年、条約改正のために、日本から伊藤博文らがアメリカにやってきたのでした。その際に、鐵之助はアメリカの経済の仕組みなどについて説明しました。そのときの働きが認められ、鐵之助は明治政府から外交官になることを命じられました。

そのころの日本は、ようやく世界の国々と貿易をするようになっていました。日本からの輸出品の中心はお茶や生糸でしたが、まったくといっていいほど売れていませんでした。日本製のお茶は、中国製のお茶に比べて優れていたのですが、まれに粉のようになったお茶が混じっていたため、中国製よりも劣っていると思われていたのでした。そこで、鐵之助は形のよい葉だけを選んで製品にし、日本のお茶は優れていて信用できる。だから、日本製品を買おうと思われるようにしていこうと、政府に提案しました。これに対して、

「そんなに手間をかけなくても。」

などという反対意見が根強くあり、鐵之助の意見は、なかなか受け入れられませんでした。それでも、鐵之助は、日本のお茶の品質を高めることの必要性をうったえ、来る日も来る日も政府の担当者のもとへ足を運びました。鐵之助のあまりの熱心さに、政府の担当者は考えを変えていきました。さらに、鐵之助は、生糸の太さのむらを少なくし、加工の途中で糸切れしていたものを取り除いて製品化することも提案し、政府の担当者から約束を得ることができました。その後、日本製のお茶や生糸などの価値が世界から認められるようになり、大幅に注文を増やしたのでした。

条約改正…条約（国と国との間で決めた約束）を話し合いによって、変更しようとすること。

貿易…国と国の間で、それぞれの国で作られた物などを輸出入すること。

しかし、それぐらいのことで満足する鐵之助ではありませんでした。鐵之助には、まだまだ取り組むべきことが山積みでした。せっかく、製品が認められるようになっても、その当時、日本には外国と貿易をする会社が少なく、注文が増えても対応できないことがしばしばありました。そんなとき、貿易会社を立ち上げたばかりの森村市太郎が、

「日本にいる福沢諭吉先生にすすめられて、貿易会社を立ち上げ、アメリカに来ました。でも、わたしはまったく英語を話すことができませんので協力してください。」

と、鐵之助を頼ってきました。日本製品の人気が高まり、製品を輸出入できる会社が必要と考えていた鐵之助にとっても、願ってもない申し出でした。しばらくして市太郎の会社が軌道に乗り会社が大きくなると、アメリカからの注文にも応じられるようになりました。そればかりか、アメリカの製品を安く仕入れて販売できるようになり、日本の人々の生活も少しずつ豊かになりました。その間も、鐵之助はアメリカだけではなく、イギリスなどでも政府の役人として、日本の近代化のために尽くしました。

どこにいても鐵之助は、日本を旅立つときに勝海舟に手をにぎりしめられたあのときのことが忘れられなかったのでしょう。外国での仕事を終えて、政府の命令により日本にもどってきてからも、鐵之助はおごることなく、いつも自分ができることに、精いっぱい取り組み続けました。

富田 鐵之助

富田 鐵之助は、天保六（一八三五）年、仙台市に生まれた。江戸で西洋の学問を学び、米国で商業経済を学んだ後、その力を認められて外交官となった。帰国後、初代日本銀行副総裁となり、貿易の仕組みを確立した。その後、東京府知事を務めた後、自分の信念にしたがって銀行や保険会社の設立に参加した。

確立…確かなものにすること。

一力 健治郎 ―東北の発展を願って―

一力健治郎

一力健治郎は、江戸時代の終わりごろの文久三（一八六三）年、仙台の唐物商の四男として生まれました。八歳のとき、茶商一力家のあとつぎとなるため養子となりました。健治郎は、時代が江戸から明治に大きく変わり、外国から新しい文化が入ってくる中で成長しました。

明治時代のはじめ、仙台藩は戊辰戦争で敗れたことにより、県の重要な役職や警察の仕事などは、戦争に勝った他県の人が務めることになりました。政府の人たちからは、「白河以北一山百文」と言われていました。「白河以北一山百文」というのは、白河から北の地域、つまり東北地方は、「一山百文」程度しか値打ちがないという意味です。

幼いころから負けずぎらいだった健治郎は、この言葉がくやしくて、何とか見返してやりたいという気持ちでいっぱいでした。

二十歳になった健治郎は、一力家の家業をつぎ、熱心に働き、店も順調でした。結婚し、子どもも生まれました。しかし、家族との暮らしに幸せを感じていたものの、一方で世の中がどんどん姿を変えるのを目の当たりにしていました。今の世に何が必要なのか、自分に何ができるのかを考え、学校に行って勉強したいと思うようになりました。そこで健治郎は、二十二歳で東華学校（現在の仙台第一高等学校）に入学し、二十四歳で第二高等学校（現在の東北大学）に入学しました。健治郎は家をはなれ、自ら寄宿舎に入るなど熱心に勉強にはげみました。

唐物…中国やその他の外国から日本に入ってきたもの。

茶商…お茶をあつかう商売。

戊辰戦争…一八六八年から次の年まで行われた新政府軍（薩摩・長州）と旧幕府軍（会津等）の戦い。

寄宿舎…学生がいっしょに生活をするための建物。

さらに日本の中心である東京で新しい情報や人々の生活の様子を直接に学びたいと考え、二十六歳で東京の国民英学会にも学びました。

二十七歳でふるさとにもどった健治郎は、「文学館」という外国の本をあつかう書店を開きました。仙台の人々が外国の本を簡単に手に入れることができ、新しい文化を学ぶことができるようにという思いからでした。また、いくつかの会社の社長にもなりました。

しかし、そのころになっても、政府の東北に対する見方は、以前と変わらないものでした。

健治郎は、東北を発展させるためには政治にかかわることが必要と考え、市議会議員そして県議会議員となり、政治家として自分ができることを精いっぱい行いました。

そんなある日、健治郎は県議会議長の藤沢幾之輔から、経営が苦しくなった「東北日報」という新聞社を引き受けてほしいとたのまれました。当時、仙台には発行部数の多い「東北新聞」と歴史のある「奥羽日日新聞」がありました。政党の考えを伝えることを主としていた「東北日報」は二つの新聞に対抗するのが難しかったのです。経営が厳しい新聞社を立て直すのは健治郎しかいないと言われ、健治郎は、しばらく考えこみました。

決断のときは、せまってきています。

「新聞なら広く情報をみんなに伝えることができる。だが、人々は新聞を読んでくれるだろうか。」

健治郎は、つぶやきました。

断ろうかと思ったとき、健治郎の中に「白河以北一山百文」の言葉がうかびました。

（よし。新しい新聞だ。今までにない東北のための新聞を作ろう）

健治郎は新聞社を引き受けることを決心しました。

国民英学会…東京の私立の英語学校。

明治三十（一八九七）年、健治郎三十三歳のときのことです。それまでの県議会議員や植林会社の社長などの仕事を全部やめ、新聞づくりにかけることにしたのです。社名は「河北新報」としました。「白河以北一山百文」という東北を軽く見る言葉に対し、それをはね返そうという強い思いを社名にこめたのです。自分の新聞づくりを通して、東北の見方を変えていきたいと考えたのです。

健治郎は、河北新報の創刊号に自分の考え方を発表しました。

一　正しく、自由公正な新聞をつくる
二　人物、文化、産業を開発し、東北地方の発展に尽くす
三　市民の味方となり、悪い習わしをなくして人々を大切にする

河北新報創刊号（河北新報社蔵）

最初は、なかなか新聞が売れず、経営は困難を極めました。

それでも、健治郎は、思いを曲げず、様々な工夫をしました。

まず、だれでも読める新聞になるように、新聞の値段を一部一銭五厘から一銭に値下げしました。また、当時、仙台で発行されていた新聞は四ページでしたが、健治郎は二ページ増やして六ページにしたり、明治三十二（一八九九）年には、地方紙として初めて英文欄をのせ、文芸欄や家庭欄も作ったりしました。さらには、明治三十三（一九〇〇）年、世の中は毎日活動しているのだから、新聞は休むべきではないと年中無休を宣言し、昭和五（一九三〇）年までの三十年間、一日も休まず新聞を出し続けました。

健治郎は、新聞は時間が命として、遅れたり配達できなくなって読者に迷惑をかけたりすることはできないと考えていました。そのため、毎朝、新聞配達員とともに配達区域の様子を見て回り、体調の悪い配達員の代わりをすることもありました。また、学生の配達員のことをいつも気にかけ、勉強のたしに本代をわたしてはげますこともありました。

当時の一銭…現在の百五十円くらい。

その間に健治郎は、東北の人のためにできることとして、社説に「農奴解放」という問題を取り上げました。当時の東北の農民は貧しく、地主に高いお金をはらって農地を借りて農業をしていました。一生懸命働いても、かせいだお金の大部分が地主のものになってしまうのです。このような国の制度を変えることが必要だと思った健治郎は、思い切って新聞に発表したのでした。しかし、政府の理解を得られず、新聞の販売を一時禁止されることになったのです。それでも、自由公正な新聞を作る、東北地方の発展に尽くす気持ちは失いませんでした。

また、昭和三（一九二八）年には「東北産業博覧会」、昭和八（一九三三年）年には「河北美術展」などの文化事業も始めました。

新聞少年の像

健治郎の情熱は人々の信用を得て、河北新報は多くの人に読まれるようになり、また、東北地方は健治郎が望んだように文化や産業も大きく発展してきました。

現在、河北新報社には、新聞配達の少年の像が建っています。その目は、未来を見すえ、粘り強く着実に前進を続ける東北人そのものでもあるのです。

一カ 健治郎

一カ 健治郎は、文久三（一八六三）年、仙台に生まれた。健治郎は実業家として成功し、宮城県議会議員や仙台市議会議員を歴任した。その後「河北新報」を創業した。現在に至っても、「河北新報」は東北を代表する新聞として、東北の発展に大きく貢献している。

社説…新聞にその新聞を出している会社の意見としてのせる文章。

酒井　げん　―女性の美しさを求めて―

現在、世界各地でファッションショーがくり広げられています。観客が注目するのは、はなやかな衣装ばかりではありません。服のデザインに合わせたヘアスタイルにも熱い視線が注がれます。「ヘアスタイリスト」は、おしゃれな子たちのあこがれの職業となっています。

酒井げん

げんは、慶応三（一八六七）年、仙台に生まれました。世の中が明治という新しい時代になり、人々の生活も大きく変わろうとしていました。それまでなかなか認められることのなかった「職業婦人」に対する人々の考えも変わる中で、げんは髪結い師として活躍しました。

げんは、ヘアスタイリストの先がけだったのです。

げんは、幼いころからきれいなものが大好きでした。中でも強くひかれたのが、美しく結い上げられた日本髪でした。きれいに髪を結った女の人が通るたび、げんの目は黒髪にくぎづけになり、姿が見えなくなるまでじっと見つめていました。

げんは、大きくなったら髪結いになって、たくさんの人の髪をきれいに結ってあげたいという思いをもつようになりました。しかし、それを口に出すことは決してありませんでした。当時は、女の人が仕事をもつことを、簡単に許してもらえる時代ではなかったのです。

十五歳になったある日、げんは思い切って両親に髪結いになりたいという思いを打ち明けました。

両親は驚きました。両親は、げんが結婚して家の中の仕事をすることを望んでいたからです。当然、げんの願いは聞き入れてはもらえませんでした。どうしても、幼いころからの夢をあきらめきれない

職業婦人…女性が社会に出て働くことが少ない時代に、職業を持って社会の中で働く女性。

げんは、何度も何度も両親にたのみました。

とうとう、父はその熱意に負け、げんが髪結い師の元へ修業に出ることを許しました。こうしてげんは、髪結い名人と言われていた横山みをの所に弟子入りすることになったのです。

髪結いの修業は、厳しいものでした。当時は、弟子は師匠の家に住みこみ、師匠の家族といっしょに暮らしながら修業を積むのがふつうで、髪結いの修業をしながら、師匠の家の家事も行いました。そうじに洗たく、三度の食事の準備、ときには、師匠の子どもたちの面倒も見なければなりません。そのようにして、お手伝いさんのような生活の中で、髪結いの勉強をするのです。

それでもげんは、少しもつらいとは思いませんでした。もともと手先が器用で、覚えの早いげんは、家事も修業も前向きな気持ちではげみ、めきめき腕を上げていきました。

十七歳になったとき、師匠から一本立ちを認められ独立したげんは、仙台で開業しました。

そのころ、めざましく西洋化が進む中、明治十八（一八八五）年、東京で医師と雑誌社員によって「婦人束髪会」がつくられ、女性をこれまでの日本髪から解放しようという動きが起こりました。不便できゅうくつな上に重い、衛生的でなくお金もかかるといった日本髪を、もっと手がかからない簡単な髪型にしようというのです。これは、女性が社会に出て仕事をしやすくするような新しい考えでした。この考えに共感したげんは、「婦人束髪促進会」をつくって、簡単で便利な髪型を研究して、多くの髪結い仲間に広めていきました。髪を後ろで一つにまとめたり、三つ編みにしてたばねてかんざしなどで留めたりするような自分で結える髪型を紹介していきました。

その後、げんは石巻に店を開くことに決めました。当時はまだ鉄道がなく、船による物の運搬が中心の時代で、海運の便がいい石巻には、東京や横浜の船がひんぱんに出入りし、都会の名士やその夫人、多くの名妓などが訪れており、そのころの石巻は流行の先がけ地だったのです。げんの思った通り、店は髪結いの客が後をたたず、大はんじょうしました。そればかりか、都会で流行している新しい髪型や

修業…学問や技術を学び身につけること。

一本立ち…一人の力でできること。

名妓…有名な芸者。長唄やおどり、三味線などを行い、酒席を楽しいものにする人。

洋装に合わせた髪型などの新しい情報もどんどん入ってきました。もともと研究熱心なげんは、それらを次々に取り入れて髪結いとしての腕をいっそうみがきました。

二十五歳まで石巻にいたげんは、再び仙台にもどる決心をしました。そのころの仙台は、県の中心地として大きな発展をとげていました。

（生まれ育った仙台の地で、思うぞんぶん髪結いの仕事をしよう）

そんな思いを胸に、げんは、東一番丁に新しい店をかまえました。

仙台で開業したげんは、江戸時代から続く日本髪の伝統を守りつつも自分の工夫を入れた新しい日本髪を結うことにも力を入れるようになりました。げんの髪結いの技術が評判になり、お得意様には地元仙台の上流家庭の奥様方が多くなりました。当時、上流家庭では、夫が朝食の席に着く前に、妻はきちんと日本髪を結い上げておく習慣があったのです。そのため、げんの店には、朝早くからお得意様が詰めかけました。げんは、お客さん一人一人の年齢や職業、個性に合わせて日本髪を結い上げました。三十種類以上の髪型があったといわれています。

げんは、お客さんの日本髪を結い上げるたびに、近くの写真屋に行って写真をとることにしました。できあがった写真の光線の加減や髪型の写りが悪いと何度もとり直しをするほど、美しい髪の写真にこだわりました。その五十人の髪型に氏名を書きそえ、『髪のしおり春笑草』という冊子にまとめました。

げんはできあがった『髪のしおり春笑草』を開き、写真を一つ一つ見つめ、うなずくのでした。

この冊子は、店のお客さんの髪型の見本や弟子の教科書のように使われたといいます。

大正二（一九一三）年、日本で最初に美容専門学校として東京女子美髪学校ができました。この学校は女性の髪結いの技術を後の世の人に伝えることを目的につくられました。げんは、髪結いの技術が認められ、名誉講師

『髪のしおり春笑草』（酒井家蔵）

上流家庭…お金持ちで、社会的な地位もある家庭。

に選ばれたのです。

「世の中では、一に衣装、二に髪型というけれど、いかに衣装が立派でも髪型が悪かったら見られたものではない。髪型がよいとどんな衣装を着ても見栄えがするもので、何より髪型が一番である。」という考えをもって、げんは、若い生徒を前に自分の技術を伝えようと熱心に教えました。

げんは、昭和十九年、七十七歳でこの世を去りました。

「髪結い」から「美容師」、そして「ヘアスタイリスト」へと、時代とともに、その呼び名は変わりましたが、現在も多くの人がげんの夢を受けつぎ、女性を美しくする仕事を発展させています。

『髪のしおり春笑草』（酒井家蔵）

酒井げん

酒井げんは、慶応三（一八六七）年、仙台に生まれた。明治、大正、昭和にわたって髪結いとして石巻や仙台で活躍した。げんは、江戸時代から続く日本独特の髪結いの伝統を残すため、自分の手がけたさまざまな日本髪を写真にとり、写真帖『髪のしおり春笑草』を作った。

名誉講師…その人のそれまでの仕事を認められた特別な先生。

志賀　潔 ― 赤痢菌を発見する ―

志賀潔は赤痢の病原菌を発見した人です。赤痢にかかると便に血が混じり高熱が出ます。当時は赤痢の正体がはっきりせず、当然治療法もわからないため、世界中で多くの人が命を失いました。

志賀潔は、明治三（一八七〇）年、代々伊達氏に仕えてきた仙台の佐藤家に生まれました。その後、明治になって家計が厳しくなり、祖父の家に預けられることになりました。祖父が暮らす志賀家は医者で、周囲からは将来祖父のあとをついで医者になることを期待されていました。

志賀　潔（学校法人 北里研究所蔵）

志賀は、難しい試験がある第一高等中学校（現在の仙台第一高等学校）に入学し、自分の将来について悩みながら学校生活を過ごしていました。人づき合いが苦手な志賀は、患者をみる医者にはなれないのではないかと思っていたのです。

そんな中、志賀は、顕微鏡を使って様々なことを調べることに強い興味をもつようになりました。あらゆるものの細部が見える顕微鏡は、志賀の好奇心をいっそうかきたてました。さらに志賀は、わからないことを先生に質問をしたのですが、先生は自ら調べ解決させるために、わざと教えてくれませんでした。これが後のがまん強くこつこつと調べる力につながっていきました。

第一高等中学校を卒業するころには、細菌学という医学への道があることを知りました。

赤痢…伝染病の一つで、赤痢菌で起こる大腸の病気。

「細菌学は、まだまだこれからの学問だ。細菌学者になることができれば、自分が得意なことを生かして仕事ができる。何より、研究の結果が病気の治療に役立ち、人の命を救うことができる。わたしの努力が多くの人の命を救い、幸福をあたえることになるぞ。」

こうして志賀は、帝国大学医科大学（現在の東京大学医学部）に入学しました。卒業後は細菌によって引き起こされる伝染病の予防や治療法を研究するため、「伝染病研究所」に入りました。

伝染病研究所には、当時細菌学で有名だった北里柴三郎が所長をしていました。大学で学んだ細菌学は講義だけで実習はなかったので、北里先生から三か月間基本的な技術を学びました。

北里先生は、研究に対してとても厳しい人でした。作業に不正確なところがあれば、何べんでもやり直しさせられ、また、研究に対して真剣に取り組まないと、大声でしかられました。しかし、北里先生の厳しい指導で負けるような志賀ではありません。むしろ、研究がどれだけ真剣なものなのかを知ることができ、自分の志す道へ近づいたと実感できるようになったのです。

研究所で研究を始めた年の六月、関東を中心に再び赤痢の患者が増え、流行のきざしが現れました。人々を赤痢の恐怖から救うために、伝染病研究所としては、何としても原因となる赤痢菌を特定し、治療法を確立しなければなりません。その研究に北里先生は志賀を指名しました。志賀は、この日から北里先生の指導を受けながら、赤痢の研究を行うことになったのです。

志賀は、下宿を引きはらい、研究室の片すみに自分の寝床を作りました。そして、研究室に泊まりこみ赤痢菌を見つけるために必死で研究しました。見つけるためには、赤痢患者の便を、顕微鏡でしらみつぶしに見ていかなければなりません。しかもそれには、自分に病気がうつってしまうかも知れない危険がひそんでいるのです。それでも志賀は、しんぼう強く顕微鏡をのぞきながら研究に取り組みました。

きざし…物事が起ころうとする、ようすやしるし。

「便の中には細菌がたくさん見つかる。しかし、どれが赤痢菌なのかわからない。これまでも、多くの研究者が赤痢菌を特定しようと努力してきたのに、なぜ見つからないんだ。どうすれば。」

なかなか進まない研究でしたが、自分に任された役割の大切さを理解していた志賀は、あきらめることなく、研究を続けました。

そんなある日、志賀がいつものように顕微鏡で一つ一つ調べていたところ、本来、体内にない菌が多くの赤痢患者から見つかりました。もしかしたらこれが赤痢菌かも知れない、と思った志賀は、実験で確かめようとしました。

しかし、何度繰り返しても思ったような結果が出ません。多くの研究者が味わってきた苦労を、今、志賀も体験しているのです。赤痢菌の特定は、まるで迷路の中を進むような作業でした。

秋が過ぎ、冬を迎えたある日、気分転かんに研究室をはなれ図書室に入りました。そこでも頭の中は赤痢菌のことでいっぱいです。あれこれ雑誌をめくっていると、外国の研究者が出した論文が目に入りました。それは、腸チフスの診断についての論文でした。

「なるほど、こういう方法もあるのか。待てよ、この方法を逆にしたらどうなるだろう。」

志賀はこの論文を応用すれば、赤痢菌の特定につながると考えました。

研究を続ける志賀潔（学校法人 北里研究所蔵）

腸チフス…腸がおかされる伝染病。熱が高くなり、げりをする。

論文…研究した結果や意見を述べた文章。

すぐに、北里先生に報告し、その研究方法についていっしょに計画を立てました。三十四名の患者の便から分離した赤痢菌と思われる菌を培養基に入れて、菌を育てました。

そしていよいよ、新たな方法を試すときが来ました。まず一つ目の培養基です。明らかに赤痢菌の反応が現れました。二つ目、三つ目と続き、何と三十四名分の培養基すべてが赤痢菌の反応を示したのです。

「間違いない、これが赤痢菌だ。やった、やったぞ。」

志賀は、心の中でこうさけぶと、喜びにあふれた顔で北里先生を見ました。

北里先生もまた、笑顔で志賀を見つめ返しました。

赤痢菌発見のニュースは全世界に飛びました。そして、赤痢菌におびえていた世界の多くの人を安心させました。今では、赤痢菌で命を落とす人はほとんどいなくなりました。

志賀　潔

志賀潔は、明治三（一八七〇）年、仙台市に生まれた。第一高等中学校（現在の仙台第一高等学校）で、細菌学の道を歩む決心をする。帝国大学医科大学（現在の東京大学医学部）を卒業後、伝染病研究所に入り、赤痢菌を苦労の末に発見した。細菌学で人類の福祉に貢献したことから、昭和二十四（一九四九）年に仙台市名誉市民に選ばれた。

培養基…研究用に細菌を育てるための、養分などを含んだ固形の物質。

本多 光太郎 ― 新しい金属をつくる ―

本多光太郎

本多光太郎は、明治三（一八七〇）年、愛知県に生まれました。小学生のころは、学校に行って勉強をするより、途中にある川で水遊びをし、魚をとることに夢中でした。しかし、兄浅治郎と寺田先生の言葉が光太郎の一生を大きく変えました。

兄は秀才で、一生懸命に勉強をし、帝国大学（現在の東京大学）入学を果たしていました。

「何も考えずにただ何となく一生を過ごすのはもったいない。」

「志をもつことが大切。」

そんな兄の言葉は、光太郎に大きな影響をあたえました。

また、小学校の教師で、夜は志のある若者を集めて勉強を教えてくれていた寺田先生は、光太郎にこんな言葉をかけてくれました。

「勉強とは何かを真剣に考えたことがありますか。勉強とは字のとおり、勉め、強いること、すなわち、あまり好きではないことでも一生懸命に努力することが勉強するということなのですよ。勉強が苦手な人は、努力をする必要があるのです。苦手なことでも他人よりたくさんの努力をすればできるようになるのです。」

「光太郎くんは決して秀才ではありませんが、苦しい農作業できたえた、強い意志と立派な身体をもっているじゃないですか。光太郎くんは将来を切り拓いていくために大切な三つの力のうち二つは、人に負けないだけの力が身についているのです。あとは、勉強だけです。」

光太郎は、胸が熱くなりました。このときから東京で勉強したいという思いが強くなっていったのです。兄の応援をもらい何とか家族の反対を押し切り、上京したのは十七歳の春のことでした。あこがれの兄のもとでともに暮らすという夢がとうとうかなったのです。光太郎は秀才といわれた兄とは違い、勉強が得意ではありませんでした。だからこそ、人の何倍も努力することを心に決めました。必死で勉強し、二十四歳のとき、兄と同じ帝国大学の物理学科に入学を果たしました。

帝国大学に入学すると、光太郎は、まるでこの世のありとあらゆるものを解き明かそうとするような勢いで、実験に取り組みました。実験が楽しくてたまりませんでした。雨の日も晴れの日も、一日も休むことなく夜中まで実験を続けました。実験器具がなければ自分で作り、決して手ぬきや近道をしませんでした。どんなに時間がかかっても、光太郎はそれを、めんどうだとか損だとは思いもしませんでした。

そんな光太郎は、いつしか人々から「実験の鬼」と呼ばれるようになったのです。

帝国大学卒業後、三年間ドイツに留学し、物理学において世界から認められるようになった光太郎は、四十一歳で東北帝国大学理科大学の教授に任命されました。緑豊かで空気が澄んでいる美しい仙台、ここが光太郎の第二の故郷となりました。

大正五（一九一六）年、世界は第一次世界大戦のまっただ中でした。外国からの品物の輸入が非常に難しくなり、生活用品や産業で使うすべての部品などを、国内でつくらなければならなくなったのです。戦争のために鉄が必要とされ、大学で、鉄の研究をしていた光太郎たちのもとには、多くの質問や注文がまいこんできました。さらに、飛行機の部品に必要な強い磁石鋼を新たに作ることを軍から依頼されました。強い磁石鋼を作るためには、鉄やコバルトなどの金属の組み合わせやそれぞれの金属の配合を考えなけ

物理学…物の性質や運動、熱・光・電気・音のはたらきなどについて研究する学問。

留学…外国で勉強すること。

磁石鋼…鉄を強化した物。

ればなりませんでした。

その組み合わせは何百万通りにもなります。すべてを試していたのでは、完成まで何十年かかるかわかりません。しかし、ここで、光太郎が今までの実験で得た知識が役に立ちました。今まで使われていたタングステン磁石鋼の配合を参考にして、ある程度配合をしぼることができたのです。あとは、実際に作ってみるだけです。

光太郎たちはせまい部屋で、炉の温度を千四百度、千五百度と上げ、実験をしていきました。あまりの暑さに、全身から流れ出る汗はふいてもふいても次から次へとしたたり落ちました。

「これはたまらない。裸になっても暑い。」

「そうだ、消防服を着ればいいのではないか。」

こうして、光太郎たちは消防服を手に入れ、水をかけながら毎日実験に取り組んだのでした。

ある日、めずらしくかぜをひき熱が続いたために、家で寝ていた光太郎のもとに、共同研究の仲間である高木が、完成した磁石鋼を持ってかけつけました。

「やっとできたかもしれない。」

高木は、その磁石鋼を一本、二本と机にていねいに置きました。その様子を、光太郎は身を乗り出し、目をかがやかせて見つめました。すでに置かれた磁石鋼の間に三本目を置いた、その瞬間でした。

クルッ、クルッ、カチャッ。

両側の二本の磁石鋼が勢いよく回転して真ん中の一本に吸いつけられたのです。

「おぉ。これは強い。」

当時における、世界最優秀の磁石鋼の誕生の瞬間でした。光太郎はこの磁石鋼を「ＫＳ鋼」と名づけました。

炉…
金属などをとかす装置。

ＫＳ鋼…
磁石鋼の一種で飛行機などに使用。

「KS」とは、光太郎の研究に資金を出してくれていた住友吉左衛門のイニシャルです。

光太郎が住友吉左衛門への感謝をこめて名づけたのです。このKS鋼は、当時使われていた磁石鋼の四倍の強さをもっていました。

「実験を続けよう。もっとすごい力をもつものができるかもしれない。」

光太郎と高木は、夜がふけるまで熱っぽく語り続けたのでした。

実験室の光太郎
（公益財団法人 本多記念会蔵）

実験や研究を重ね、KS鋼をはじめとした多くの発明をした光太郎は、いつしか「世界の本多光太郎」として有名になっていきました。日本人はもちろん、外国人も光太郎が「鉄」における世界で最も優秀な学者であると認め、光太郎を「鉄の神様」と呼びました。多くの科学者たちが指導を求め、宮城の地、「東北大学金属材料研究所」で研究を続けている光太郎のもとを訪れるようになりました。

光太郎は、八十四歳で亡くなるまで、自分が学んだことや自然を解き明かす方法などを、多くの人におしみなく伝えました。仙台を第二のふるさととし、自らの「志」を果たした光太郎は、今でも世界の人々からたたえられています。

本多 光太郎

本多 光太郎は、明治三（一八七〇）年、愛知県に生まれた。東京帝国大学理科大学に進学後、外国へ留学して磁気理論を学んだ。その後、東北帝国大学理科大学の教授となり、世界最強と名高いKS鋼（磁石鋼）を作り「世界の本多光太郎」といわれた。その功績から、昭和二十四（一九四九）年に仙台市名誉市民に選ばれた。

土井　晩翠 ― 新しい詩の世界を開く ―

春高楼の花の宴
めぐる盃影さして
千代の松が枝わけ出でし
むかしの光いまいづこ

【歌詞の意味】
春には、もとここにあった城の中で、にぎやかな花見の宴が行われたにちがいない。はずむ声、笑い、酒をくみかわすさかずき…。そして、城壁の大きな松の枝あいからは、月の光がさしこんでいたであろう。そんな昔のおもかげは、今はどこへいったのだろうか。

仙台市を眼下に見下ろす青葉城址には、郷土が生んだ詩人、土井晩翠の名作「荒城の月」の詩碑があります。この詩は明治三十一（一八九八）年上野の東京音楽学校（現在の東京芸術大学）から頼まれて作られたものです。滝廉太郎により曲がつけられ、時代を越え人々に歌いつがれています。

青葉城址の「荒城の月」詩碑（仙台市文学館蔵）

晩翠は、明治四（一八七一）年、仙台市北鍛治町（現在の青葉区木町通）で質屋を営む、土井林七の長男として生まれ、名前を林吉といいました。小さいころから、祖母に和歌の手ほどきを受けたり、父親から八犬伝などの物語を聞いたりして育ち、本を読むのが好きな子どもでした。

小学校の授業で、中国の歴史物語『十八史略』を学ぶと、難しい本にも興味をもち、夢中になって

質屋…お客さまがもってきた着物などの品物をあずかりそれと交換にお金を貸す商売。

和歌…古くから日本にある定型詩。主に五七五七七の句からなる。

八犬伝…江戸時代後期に滝沢馬琴によって著された本。

読むようになりました。その勉強ぶりは、先生方をも驚かせるほどでした。

「本には、ぼくの知らないたくさんの知識がつまっています。もっともっとたくさんのことを知りたくてたまりません。先生、ぼくは、中学（現在の高校）に進んで、学問を学びたいのです。」

林吉は、真剣なまなざしで自分の夢について語るのでした。

十三歳で小学校高等科（現在の中学校）を卒業した林吉は、いよいよ中学校への進学を本気で考えるようになりました。ところが、祖父から商売をするのに学問などは必要ないのだから、中学などに絶対やってはならないと、強い口調で言い渡されてしまった父は、祖父のいいつけにそむくことができず、林吉にそのことを告げるしかありませんでした。

父に説きふせられた林吉は、質屋の店先で見習いとして働くことになり、毎日、お客さんを相手にしたり、品物を倉から出し入れしたりする仕事にあけくれました。しかし、林吉は、『自由の燈』という新聞やその当時発刊されたばかりの『新体詩抄』という本をいつも大事にたずさえていました。少しの時間を見つけては、ひとみをかがやかせ、未来に夢をもちながら、新しい形の詩を口ずさむのでした。『新体詩抄』には、西洋の詩を翻訳したものもありました。林吉は、西洋の文学や英語にも興味をもち始め、英語の通信教育も始めました。見習いの仕事をしていても、学ぶことはやめませんでした。

十六歳のころ、林吉は、このまま質屋の主人としての仕事をずっと続けていくかどうかを考えていました。そんなとき、すぐ近くの仙台の国分町に「仙台英語学校」ができることを聞きました。当時としてはめずらしい英語を学ぶ学校で、働きながら学ぶことができたのです。しかも、英語学者として有名な齋藤秀三郎先生が教えてくれるという話を聞くと、林吉はいてもたってもいられませんでした。店で品物を並べているときも、重い荷物を運んでいるときも、頭の中は英語学校のことでいっぱいでした。

新体詩抄…伝統的な短歌や俳句に代わる新しい詩型を提示した詩集。

翻訳…ある国のことばや文を日本語に直すこと。

英語学者…英語に関する学問を研究する人。

いったんは父にしたがった林吉でしたが、胸に燃える学問の灯はとうてい消すことができなくなっていました。

林吉は、ある夜、思い切って父と祖父の前に正座して話を始めました。

「わたしは、どうしても英語学校で勉強したいのです。店の手伝いもしますから、通わせてください。」

祖父は、ふきげんな顔をしながらいいました。

「お前が跡をつがなければ、この質屋はどうなるんだ。」

「お父さんがじょうぶなうちは、自分の好きな学問をしてもよいのではないですか。」

しばらく沈黙が続きました。やがて、父が口を開きました。

「店での修業に努めながら、合間を見ては本を読むおまえの姿を見ていたよ。しかたない。お前がどうしても学問をしたいという気持ちはわかった。」

父の言葉を聞いた祖父も、

「よかろう。ただし、中途半ぱな気持ちではいけないぞ。」

と、ついに進学を許しました。

林吉は英語学校での授業を思いうかべ、自然と笑みがこぼれました。

喜びいさんで通学し始めた林吉は、夜中まで机の前に座っていることがよくありました。マコーレーの『フレデリック大王論』や、ビクトル・ユーゴーの伝記などに心をうばわれ、英雄や文学者の面影を心に描きました。あれこれ想像していると、時間のたつことも忘れてしまうほどでした。

その後、仙台にできた第二高等中学校（現在の東北大学）に十八歳で入学し、学問への情熱をますます燃やしました。

さらに、校友会雑誌に詩をのせる機会を得て、ペンネームを晩翠としました。東京帝国大学（現在の東京大学）英文科に進み、勉強のかたわら、雑誌『帝国文学』の編集委員となり、次々と詩を発表し、堂々として力強い晩翠の詩は評判になりました。晩翠は、日本を代表する詩人となり、『新体詩』と呼ばれる新しい詩の確立に大きな功績を残しました。

詩人として成功した晩翠は、明治三十三（一九〇〇）年、仙台にもどり母校である第二高等学校（現在の東北大学）の英語の教授になりました。また、晩翠は外国文学の翻訳を行ったほか、多くの校歌の作詞を手がけました。仙台市立立町小学校の校歌には「努めて倦まず身を立てて国と民のためつくせ」（途中であきらめることなく努力を続け、人々のためにつくしなさい）という歌詞があります。このような生き方を語りかける晩翠はたくさんの市民に慕われました。

現在も、「荒城の月」は多くの人に歌いつがれています。

青年期の土井晩翠（仙台市文学館蔵）

土井晩翠

土井晩翠（土井林吉）は、明治四（一八七一）年、仙台市に生まれた。東京帝国大学（現在の東京大学）英文科を卒業後、島崎藤村と並ぶ詩人として注目され、「新体詩」と呼ばれる新しい詩の確立に大きな功績を残した。昭和二十四（一九四九）年に仙台市名誉市民に選ばれ、文化勲章も受章した。代表作に『天地有情』がある。

が守り続ける風景(松島町)

先人も見た風景　わたしたち

伊達 政宗 ― 仙台藩を豊かな地に ―

政宗は戦国時代に生まれました。当時は織田信長や豊臣秀吉、徳川家康といった人物が天下統一をなしとげようとして、日本各地で戦が絶えない時代でした。東北の大名伊達家の長男として生まれた政宗も、当時の大名たちがそうであったように、領地を広げ天下を取りたいと願いました。それが政宗の夢でした。

政宗は十五歳で初めて戦を体験して大いに手柄を立て、わずか十八歳で伊達家の当主となりました。その後も各地で激戦を繰り広げました。常陸（現在の茨城県）の有力な大名である佐竹氏などの大軍と戦った「人取橋の戦い」では、多数の敵を相手に政宗も自ら戦いに加わるなど、苦戦の末、何とかもちこたえて伊達の名を挙げました。続いて、最大のライバルである会津の蘆名氏との決戦となった「摺上原の戦い」では、激しい攻防の末に、蘆名氏を攻め滅ぼしました。さらに間を置かず二階堂氏も倒し、ついに政宗は、現在の山形県と宮城県の南部、福島県の大半を領地とする東北一の有力な大名となったのです。政宗は全国にその名を広く知られることとなりました。このとき政宗はまだ二十三歳、その目は天下を見つめ、夢は大きく広がっていきました。

伊達 政宗　騎馬像

しかし、そのころ、時代は大きく動いていました。すでに豊臣秀吉が全国の大半の大名をしたがえ、天下統一まであと一歩と迫っていました。秀吉にしたがっていない有力な大名は、関東の北条氏と奥州（東北地方）の伊達氏ぐらいでした。しばらくして、政宗に秀吉から書状が届きました。「北条氏を攻めるので、伊達家は豊臣家の家臣として私にしたがうように」とのことでした。（豊臣秀吉は強大だ、戦って勝てる相手であろうか。だが、ここで秀吉に屈したら自分の

手柄…功績をあげること。

当主…主（あるじ）。

豊臣秀吉…織田信長の家臣で、信長の死後、天下統一を果たしました。

書状…正式な手紙や文書。

夢はどうなる）秀吉と戦うべきか、それともしたがうべきか。政宗は書状を固く握りしめ口を真一文字に結び、静かに目を閉じました。何日も悩み続けました。そして、ついに政宗は伊達家を守るために秀吉にしたがうことにしました。

こうして伊達家は生き残ったものの、政宗は領地としていた福島県の大半を没収されました。さらにその後、生まれ故郷の山形県南部を取り上げられ、宮城県の岩出山や大崎、名取、亘理などの地域を代わりにあたえられて、現在の宮城県のほぼ一国と岩手県や福島県の一部を領地とすることとなりました。けれども、新たな領地には荒れ地も多く、豊かな土地を奪われたも同じでした。

それでも、政宗は「奥州に伊達政宗あり」を天下に示そうとの強い気持ちを持ち続けました。秀吉の命令で京（京都）に上ったときの伊達軍は、濃紺の布地に金色の日の丸の旗を高く立て、騎馬武者は黒の鎧と兜を身につけて金色に輝く太刀を腰に差し、槍を持った武者は金色の陣笠をかぶって朱塗りの太刀を腰に差すなど、目を見張るものでした。そのはなやかな姿を見た京の人々の間では、「伊達者」として長くうわさになりました。

再び政宗に天下を目指す機会が訪れたのは、「関ヶ原の戦い」のときでした。このころの政宗はまだ三十歳代、多くの有力な大名が年老いている中で飛び抜けた若さです。戦が長引けばチャンスはありました。しかし、「関ヶ原の戦い」はわずか一日で徳川家康の勝利で終わってしまいました。政宗は、

「天は徳川家康を選ばれたか……。これで天下は家康のものになるだろう。我が夢はここで終わりか。」

つぶやくようにそう言うと、ため息をつきました。

その後、政宗は自ら名をつけた仙台城に移り住みました。毎日、仙台城から眼下に広がる町や広瀬川、太平洋の青い波打ち際まで続く荒れ地を見渡しているうちに、政宗はしだいに考えこむようになりました。（夢は終わりと思ったが、伊達家は広大な領地を得て目の前に広がっている。これが自分が求めてきた藩の姿、天下ではないか）政宗は目を閉じ、さらに考えました。

（長年、自分の夢とお家のために突き進んできた。しかし、振り返ってみると藩の様子はどうだろうか。氾濫を繰り返

没収…取り上げられること。

濃紺…濃い青色。

陣笠…足軽が頭にかぶる三角の笠。

朱塗り…朱色にぬられていること。

関ヶ原の戦い…徳川家康と石田三成が全国を二つに分けて争った戦いで勝った家康が天下を握りました。

徳川家康…江戸幕府を開いた大名で、この後、長く江戸時代が続きました。

仙台城…現在の青葉城のこと。

氾濫…川の水があふれ洪水になること。

す広瀬川などの多くの川、目の前に広がる荒れた土地、そこで苦労して暮らす民の姿。自分がやるべきことは、まだまだあるのではないか）目は再び開かれました。政宗は前を見つめ、小さいがはっきりとした口調で言いました。

「夢が終わったなどと、考え違いをしていたようだ。我が夢は一つだけではない。」

その後の政宗の動きは早いものでした。かつて政宗は、ある僧を招き、国を治めるとはどういうことかをたずねたことがありました。そのとき、僧は、

「国づくりとは樹木で山々を埋めることである。」

と答えました。政宗はこの言葉を思い返していました。（樹木で山々を埋めるとはすなわち、山に樹木を植えて川の氾濫を防ぎ、水や水路をしっかり確保することだ。水を制する治水こそが、我が新たな夢の始まりである）

政宗は本格的に治水工事に取りかかりました。川村孫兵衛重吉という優秀な技術者も得ました。生活に必要な水を町のどこからでも取り入れることができるように、川の上流から水を引き町に水路を作りました。水は高いところから低いところへ流れるので、水路にはいつも水が流れるようになりました。この用水が、城下町仙台を流れる四ツ谷用水と呼ばれるものでした。

政宗はさらに、川の流れる道筋を変える大工事を行うよう命じました。この事業はその後も引きつがれ、政宗の跡をついだ藩主は、河口に大きな船も入ることのできる港を作らせたり、石巻から松島湾を通って阿武隈川の河口まで続く運河を作らせました。その結果、海が荒れても船が安心して荷物を運ぶことができるようになりました。また、少ない人手でも一度に大量に米を船で運ぶことができるようになり、その米を江戸（東京）に運んで売ることができるようになりました。政宗の先見の明は、後の仙台藩の発展につながっていったのです。

また、政宗は防風林を作ることも命じました。各地から良質の松や杉の苗木を取り寄せ、植林も行いました。松林や杉の林は水源の保護にもつながり、成長した木々は建築材料として江戸に運ばれることで、藩の貴重な資金になりました。さらに、政宗は仙台城下の道を碁盤の目のように作りました。これは城を敵から守るため、簡単には城にたどり着けないよう複雑な道を作るのが当たり前だった当時の城下町としては、とても考えにくいことでした。

民…藩の人々。

僧…この僧は曽洞宗三国山洞仙寺（石巻市）住職・良悦と伝えられています。

運河…この運河は現在、貞山運河（貞山堀）と呼ばれています。

先見の明…先を見通す力、能力。

しかし、商工業の発展のためには、まっすぐで便利な道はとても助けになるものでした。すでに政宗の目には戦などではなく、もっと別の大きな夢が見えていたのでしょう。城の町や村の姿はこうして大きく変わっていったのです。

現在、宮城県は米所として全国的に有名になりました。広瀬川の流れと美しい風景は人々の心をなごませ、「杜の都」仙台市にはけやきが立ち並び、青葉祭りや七夕祭りには毎年多くの人が宮城県を訪れています。今の宮城県の基礎を作ったのは、まぎれもなく伊達政宗です。政宗の夢は大きく開き、実を結んだのでした。

伊達政宗はこの他、味噌づくりも奨励しました。戦のときの食糧として味噌が重宝されたこの時代、気温が高く暑い夏でも仙台藩の味噌は味が良い上に変質しないと評判でした。政宗は、城下町と江戸の伊達藩領内にそれぞれ大規模な味噌づくりのための施設を建てました。その場所（仙台市青葉区川内大工町　仙台第二高等学校正門横）には現在石碑が建てられています。石碑には「仙台みそは藩祖伊達政宗公が城下花壇に御塩噌蔵を設け（中略）後に江戸市中でも一般にはらい下げられ、仙台みその名が広まった」とあります。

仙台みそ発祥の地 石碑

伊達 政宗

伊達 政宗は、永禄十（一五六七）年、米沢城主伊達輝宗の長男として生まれた。十七歳で伊達家十七代の当主となった。政宗は戦国時代を力強く生きぬいて、仙台城（青葉城）を築き、ついには仙台藩六十二万石の初代藩主となった。その勇壮な戦いぶりと、幼少時代にわずらったほうそう（天然痘）により片目を失明したことから、後に「独眼竜」と呼ばれた。

支倉　常長　―粘り強く役目を果たす―

慶長十八（一六一三）年十月二十八日、石巻の南にある牡鹿半島の月浦から一せきの船が出航しようとしていました。サン・ファン・バウティスタ号という大きな洋式の帆船です。これからこの船に乗って支倉常長は、太平洋を渡り、遠くメキシコやスペイン、ローマへと旅立つのです。当時、日本人が太平洋を渡るのは、命がけの大冒険でした。

浜では大きな声があがり、船の乗組員たちも手すりから身を乗り出して、激しく手を振りました。常長は、主君伊達政宗から大切な手紙を預かっていました。

宮城県慶長使節船ミュージアム内に係留されているサン・ファン・バウティスタ号

> わたしたちは、メキシコやスペインのみなさんと仲良くなり、自由に船で行き来できるようになりたいと思っています。また、キリスト教のすばらしい教えを、もっと深く学びたいと考えています。くわしくは、わたしの使いとして支倉常長を送りますので、交渉してください。
>
> 奥州仙台藩主　伊達政宗

手紙は、スペイン国王とローマ法王にあてたものでした。

今回の旅の案内役であるスペイン人の神父ルイス・ソテロは、常長のとなりに並び、不安げに声をかけました。

「常長殿、政宗様はスペインやメキシコの進んだ文化を、仙台に広めたいとお考えですね。でも、今、日本は、スペインとの交渉に必要なキリスト教を禁じようとしています。とても難しい交渉になるでしょうね。」

帆船…帆をかけた船。

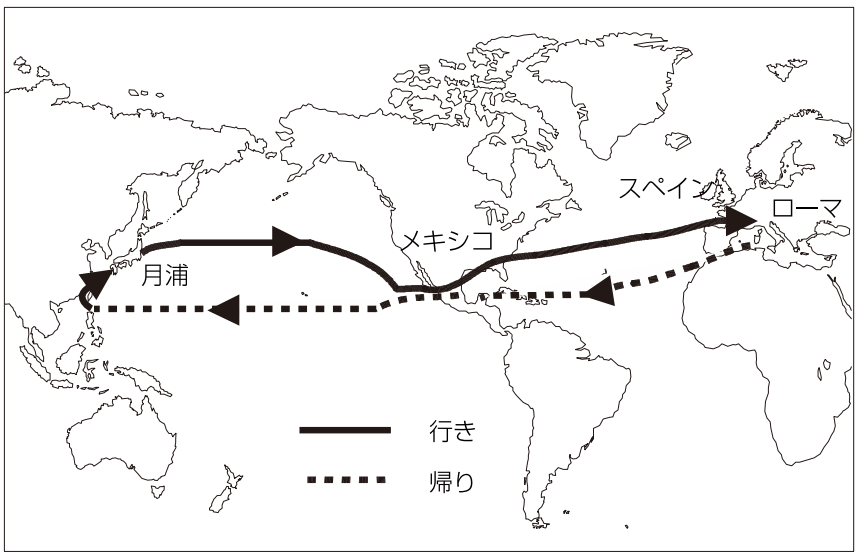
「うむ。外国の人々は、簡単にわれわれを受け入れてはくれないだろう。神父、仲立ちをよろしくたのむぞ。」

常長は、手紙をにぎりしめながら、しだいに遠くなる浜をじっと見つめていました。

太平洋の大海原に出たサン・フアン・バウティスタ号は、大きなあらしにもあいました。命がけのできごとの中、スペインの乗組員は、神にいのりながらもてきぱきと仕事を進めていました。常長はスペインの人々の進んだ技術と、心を強く支えているキリスト教の力を感じながら、その様子を真剣なまなざしで見ていました。

月浦から出航し、およそ二か月がたったころ、バウティスタ号のまわりに海鳥がふわりとよってきました。いよいよ見知らぬ国に入ります。ここから外国との交渉が始まるのです。

使節団の一行は、アカプルコにバウティスタ号を残し、陸地を通ってメキシコ市に移動しました。メキシコ市に着いた常長は、副王に会うことができました。常長は、政宗の考えを熱心に説明し、協力してくれるようにたのみました。しかし、副王は、なかなか協力すると約束してはくれませんでした。遠く日本から命がけで海を渡ってやってきたのに、どうして協力してくれないのだろう。信じてくれていないのか。ここで旅が終わってしまうのではないか。常長は、歯がゆい気持ちでいっぱいになりました。けれども、自分にこんな大役を任せてくれた政宗の顔を思い出しながら、何度も何度も宮殿に足を運び、根気強く使節の目的を説明しました。



使節団…主君(ここでは殿様)の命により、派遣された使者たち。

副王…王の次の位の人。

常長がしんぼう強く交渉したことで、副王は、使節団がヨーロッパに行き、直接スペイン国王に会うことができるように取り計らい、さらに旅の資金も援助すると約束してくれました。常長の思いがようやく一歩前進した瞬間でした。

しかし、その後も苦労の連続でした。常長はスペイン国王フェリーペ三世に会うまで、さらに約四十日も待たせられました。その間、常長はいらいらしてくる気持ちを押さえながら、どのように交渉すれば、国王の心を開くことができるか考えました。頭の中には、遠く日本にいる主君の顔や家族の姿、そして、これまでの旅で出会った人々がうかんでいました。あれこれと考えながら歩いているうちに、常長は街の教会の前に立ち止まりました。常長が目にしたのは、高い天井と大理石の太い柱、ろうそくの炎の向こうにたたずむキリストの像でした。その像は、悩み苦しんでいる常長自身を包みこむような優しいまなざしで見つめているようでした。常長は心を落ち着けて、自分の信じていくべきものは何なのか、自分の使命は何なのかを考え直し、心の糸をゆっくりほどいていくようにキリストの像を見つめ続けました。

長い間待たされた結果、常長はついにスペイン国王に会うことができました。国王を前にして、常長は、政宗の書状を堂々と読み上げました。さらに、次のようにつけ加えました。

「わたしは、国王様に見守られながら、キリスト教の洗礼を受けたいのです。これからもずっと、あなた方といっしょに神様を信じさせてください。」

常長は、自分もキリスト教の信者となると決心していたのでした。その後、常長はマドリードの教会で、国王フェリーペ三世の見守る中、キリスト教の洗礼を受けました。

「ドン・フェリーペ・フランシスコ・ファシクラ。これが、あなたの洗礼名です。」

聖歌隊が歌う祝いの歌が、美しいオルガンのひびきとともに常長の体にしみこんでいくようでした。また一歩、常長は、自分の思いを前進させることができました。ローマへ向かう使節団の足取りも軽く、行き先

洗礼…キリスト教で信者になるための儀式。

も明るくなってきました。

数か月後、使節団はいよいよローマに到着しました。高らかなラッパの音が鳴りひびく中、使節団は堂々とローマ市内を行進しました。刀を下げ、白馬にまたがった者、長刀やからかさを手にした者が続きました。常長は鳥や草花がししゅうされた白いはおりとはかまに身を包み、馬に乗って行進をしました。その和服姿は、ローマの人々の目をうばうほどあざやかでした。常長は、月浦を出航してから二年余りの長い旅の日々を思い起こしました。

国宝 支倉常長像（仙台市博物館所蔵）

ついに常長は、市内の宮殿でローマ法王に会うことができました。常長は、

「ここまでわたしたちを、無事に導いてくださった神に感謝します。」

と言いながら、ローマ法王に深く頭を下げ、政宗から預かった手紙を差し出しました。

宮殿を出た使節団の目には、うっすらと光るものがありました。自分の思いに近づいたことを感じた常長も、胸にこみ上げる熱いものを感じながら、どこまでも続く青く晴れたローマの空を見渡しました。

支倉 常長

支倉 常長は、江戸時代初め、仙台藩主伊達政宗の命令により、「慶長遣欧使節」として太平洋と大西洋を渡りスペイン、ローマへ向かった人物である。現在、出発した石巻市には、復元船サン・ファン・バウティスタ号が展示されている。

長刀…武士が使用していた、長い柄の先端に刃物がついている武器。

からかさ…竹に紙をはって油をひき柄をつけたかさ。

大槻文彦 ―本格的な国語辞書をつくる―

明治維新後の新政府にとって、わが国の近代化を進めるためにやるべき仕事は山ほどありました。中でも国語を統一することが大きな課題であり、そのためには、本格的な国語辞書を急いで作ることが必要でした。文部省（現在の文部科学省）は、さっそく高名な学者たちを集めて、辞書づくりに取りかかりました。しかし、議論ばかりでなかなか仕事が進みません。とうとう途中であきらめて、改めて若手の学者に任せることになりました。白羽の矢が立ったのが、当時仙台にできたばかりの宮城師範学校の校長をしていた大槻文彦でした。

文彦は、江戸時代後期の代表的蘭学者である大槻玄沢を祖父に、幕末期の開国論を指導した大槻磐渓を父に、弘化四（一八四七）年、江戸で生まれました。祖父玄沢は、現在の岩手県の南端に位置する一関藩の藩医でしたが、後に仙台藩の藩医に選ばれて江戸詰めとなり、以来大槻家はずっと江戸で暮らしていました。文彦が生まれたのは、玄沢が亡くなってから二十年も後のことですが、玄沢の洋学を取り入れようとする考え方は、磐渓を通して文彦に引きつがれ、文彦は英語をはじめとする洋学に通じていました。

日本語の本格的な辞書を作るには、まず、日本語が昔から現在まで実際にどのように使われてきたかを広く調べた上で、日本語の文法を正しく整理しなければなりません。そのためには、日本語と西洋諸国の言語とを比較し、日本語がどのような特徴をもっているかをしっかりとらえることが必要になります。

文彦は、今までだれもやったことのないこの仕事に、ただ一人で立ち向かったのです。明治八（一八七五）

白羽の矢…
多くの人の中から、特にねらわれて選び出されること。

蘭学者…
江戸時代に西洋の学問を研究した人。

年二月に始め、約四万語を収めた国語辞書の原稿ができあがったのは明治十九年三月。実に十一年の苦心の末でした。しかし、文部省はなぜか印刷に取りかからないまま時間がたっていきました。

明治二十一年十月、文部省から文彦がすべての費用を自分で負担するなら、この原稿を使って出版してもよいとの連絡が来ました。「この原稿を何とか世に出したい」文彦はそんな思いでさっそく私財をかき集め、出版に取りかかりました。

校正作業などで思わぬ時間がかかり、結局わが国初の五十音引き国語辞書『言海』全四冊の発行を終えたのは、二年半後の明治二十四年四月でした。前年の十一月には一歳の娘を、続いて十二月には妻を病気で亡くすという不幸にみまわれる中での完成でした。文彦は、足かけ十七年の道のりを振り返り、言海の奥書に「私の父(磐渓)がかつて祖父(玄沢)の戒めとして、事業というものはいい加減な気持ちで始めてはならない、決断して始めた以上はやりとげるまでは絶対やめないという精神がなければならないと語っていた。私は、常にこの戒めを胸に刻んできた」と書いています。さらに、これで辞書づくりが終わるのではなく、これからも改良に努めていくという決意をも述べています。

『言海』の稿本
(仙台第一高等学校)

この大仕事を成しとげた後、明治二十五年四月、文彦は新設された宮城県尋常中学校の校長に迎えられました。初代校長として学校の基礎固めに力を注ぎ、三年半ほどを仙台で過ごした後東京にもどりましたが、その後も文彦は宮城県に心を寄せ続けました。災害の際には義援金を

私財…個人の財産。

奥書…書物の最後に発行のいきさつなどを記した文。

稿本…手書きの原稿を写真にとって本にしたもの。

出し、旧仙台藩領出身の若者の育英事業に努め、仙台藩の歴史に関する本も数多く書きました。

大正元（一九一二）年、六十六歳の年に、東京の出版社のすすめで、いよいよ言海の増補改訂に取り組むことになりました。再び辞書づくりに没頭する毎日です。高齢でしだいに体力も衰える中、どこへ行くにも仕事を抱えていきました。このころ、ある人に出した手紙に「言海の改訂作業も、毎朝七時から少しの休みも取らず夜まで続けている。さすがに夜九時ともなると、七十五歳の身は疲れて倒れそうになる」と書いています。そして「この手紙を書く時間もおしいくらいだ」ともつけ加えています。

昭和三（一九二八）年二月、文彦は、言海の改訂作業の完成を見ることなく、八十二年の生涯を閉じました。文彦亡き後、兄の大槻修二や関係者が作業を引きつぎました。そして、昭和七年から『大言海』四巻が刊行され始め、最終の索引の部が出て完結したのが昭和十二（一九三七）年、作業を始めてから二十五年の月日が流れていました。

文彦は、これほどまで辞書づくりに打ちこむ理由について、ある本の中で「一国の国語は、外国に対しては一つの民族であることの証拠となり、国内においては同胞としての一体感を固めるものである。国語の統一は、国の独立の基礎であり、目印でもある」と書いています。つまり、文彦にとって辞書づくりは、明治という新しい日本の国づくり、文化づくりそのものだったのです。こうした使命感こそが文彦を一心に辞書づくりに、そして、近代国家にふさわしい日本語づくりに向かわせたのでした。

文彦の一念は、鎖国の時代にあっても西洋の情報を積極的にわが国に広め、日本変革の先駆けとなった蘭学者玄沢、開国論を強く主張し、常に日本という国の正しい進路を求め続けた漢学者磐渓、この三代をつらぬく志でもありました。

増補…書物の内容をおぎない増やすこと。

改訂…書物の欠点を直すなど内容を改めること。

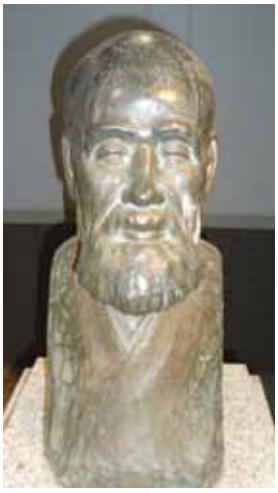
同胞…同じ国民、民族のこと。

変革…社会などを変えあらためること。

先駆け…同じ事を行っている人の先になること。

文彦が宮城県尋常中学校の初代校長を務めていたころの教え子たちが、後に文彦を慕って、東京で文彦を囲む会を作りました。大正十四年、この会が文彦の喜寿を祝って、文彦に木彫りの胸像をおくりました。その胸像について会の代表である吉野作造が由来を記しています。その中で「初代校長として来任された大槻文彦先生は、深く全校生徒の敬慕を受け、また先生が生徒を見るのも真に肉親の子弟をみるようでありました」と文彦の人柄を書いています。

昭和四十四（一九六九）年、この胸像がブロンズ製となって、宮城県尋常中学校の後身である仙台第一高等学校に建てられました。以来、この学び舎の中で、文彦がこよなく愛した郷土の若者たちの成長を、日々静かに見守っています。



ブロンズの胸像
（仙台第一高等学校）

大槻 文彦

大槻 文彦は、弘化四（一八四七）年、江戸（現在の東京都）に生まれた。宮城師範学校（現在の宮城教育大学）校長を務めた後、日本初の国語辞書づくりに携わり、十七年をかけて約四万語を収録した『言海』を完成させ、自費で刊行した。その後も、辞書の改訂作業に一生をささげた。

喜寿…
数え年七十七歳。

吉野作造…
大正時代の政治学者、思想家、大正デモクラシー（民主主義など）を唱えた。

敬慕…
尊敬され慕われること。

佐藤 清右衛門 ― 暴れ川と闘う ―

阿武隈川は、福島県南端の旭岳に源を発し、福島県内を南から北に貫いて宮城県丸森町に入り、亘理町の「鳥の海」付近で太平洋に注ぐ、全長二百三十九キロメートルのわが国で六番目に大きな川です。

江戸時代の初めに、今の福島県北部に位置する伊達郡と信夫郡が天領になり、そこで収穫された米を江戸に運ぶようになったことをきっかけに、阿武隈川を利用した舟運が盛んになりました。明治時代に入ると蒸気船も運行されるようになり、物資だけでなく人々の交通路としての重要度も高まっていきました。

一方で、当時は川の両岸の往来は渡し舟で行われていたため、阿武隈川のように大きな川を渡るのは決して簡単なことではなく、特に大雨が降った後は水が増え何日も渡し舟が止まり、人々が困ることもしばしばでした。

明治二十四（一八九一）年、丸森村（現在の丸森町）の二瓶廉吉は、阿武隈川を挟んだ対岸の舘矢間村（現在の丸森町）との間に橋をかけようと立ち上がりました。両村の有力者に呼びかけた結果、二瓶を含む十八人がお金を出し合って隈共社という会社を設立し、この会社が橋を建設することになりました。いろいろと研究した上で、「舟橋」という方式を採ることになりました。これは、両岸に太いロープを渡し、このロープにつないで何艘もの舟を並べ、その舟の上に橋脚を立てて橋を通すというものでした。

天領…江戸幕府が直接治めた土地。

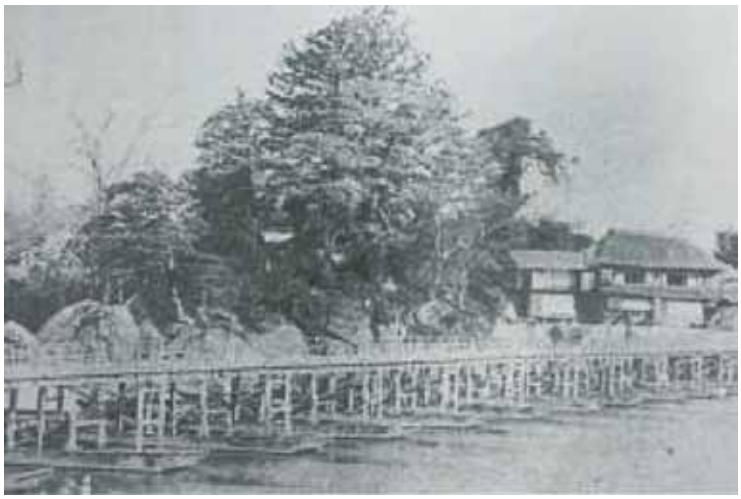
舟運…舟による交通や輸送。

橋脚…橋を支えるはしら。

工事は明治二十四年十二月に始まり、翌年五月に完成しました。地元の人々はこれで安心して生活できると、それはたいそうな喜びようでした。

この舟橋は、通行する人から橋銭をもらい、それで必要な経費をやりくりするものでした。こうした会社の経理関係の仕事を引き受けたのが、舘矢間村の住人佐藤清右衛門でした。

清右衛門は、当時三十歳。隈共社の中では若手でしたが、熱心に仕事に取り組み、周囲の人々から厚い信頼を集めていました。いつしか会社の経営に深くかかわるようになっていきました。



完成した舟橋（丸森側から見たながめ）

阿武隈川は、昔から「暴れ川」と言われたように、舟橋ができた後もたびたび洪水を繰り返し、幾度となく橋の修復が必要になりました。橋の完成から十五年後、明治四十年八月の洪水で、とうとう橋を支える舟まですべて流され、また、川の流れも大きく変わってしまいました。このため、舟橋の復旧をあきらめ、二年後にようやく木橋として再建することができました。しかし、その後も台風や大雨による被害が後を絶ちませんでした。

このような果てしない自然との闘いが続く中で、橋銭のわずかな収入に対して、度重なる橋の修繕や建て替えで莫大な出費を強いられたことから、隈共社を作った人たちも「我々の力で阿武隈川を相手にするのは無理だ」と、一人また一人と手を引いていきました。さらに、明治四十四年秋に隈共社

橋銭…橋を通行するための料金。

の発起人であった二瓶廉吉が亡くなると、その後は、事実上、清右衛門一人で一切を切り盛りしなければならなくなりました。

それでも清右衛門はあきらめず、

（ここでやめるわけにはいかない。人々のために自分が最後までやるしかない）

と、橋の経営を続けました。当時の清右衛門のあまりに一徹な姿勢に、清右衛門と親しい人たちの間でも、「清右衛門に金を貸してはならん」と言い合ったということです。

こうして、独力で橋を維持するために多くの私財を投じ、様々な苦労を重ねた末、清右衛門は大正七（一九一八）年に五十七年の生涯を閉じました。その五年後、橋は地元の要望を受けて県が管理することになり、さらにその六年後、鉄橋に建て替えられ、丸森橋と呼ばれることになりました。清右衛門が亡くなったあと、鉄橋が完成するまで約十年。清右衛門の一念が通じたのか、この間阿武隈川には珍しく、大きな水害は発生しませんでした。当時の最新の技術で建設されたこの鉄橋は、地元の人々から「モダン橋」と親しまれ、昭和、平成の時代を通して八十年以上にわたり、人々の安全な生活と地域の発展に貢献しました。

現在丸森町内を走っている国道一一三号は、新潟県、山形県、宮城県、福島県を横断して日本海と太平洋をつなぐ北日本の大動脈です。この道路が、福島県、宮城県を縦断する阿武隈川とただ一か所交わるのが丸森橋です。

平成二十四（二〇一二）年五月、この丸森橋の約一キロメートル下流に、「丸森大橋」が完成しました。長さ五百五十六メートル、幅十五メートルと、これまでの橋とは比べものにならない大きさです。

一徹…真剣に取り組むこと。

一念…強い思い。

大動脈…中心となる道路。（人間の大動脈の役割からのたとえ）。

今後は、丸森橋に代わり、丸森大橋がさらに大きな役割を果たしていくことが期待されています。この橋の完成は、時代に合った新しい橋をという地元の人々の願いが実現したものです。清右衛門の生涯をかけた思いがより確かな形で実を結んだともいえます。

丸森町中心部の小高い丸に、神明社という神社があります。この境内の一角に、隈共社の歴史を記した記念碑が建てられて、すでに百年ほどになります。いまこの碑のちょうど正面の方向に、丸森大橋がその美しい姿を見せています。十八人の隈共社を作った人々はもとより、陰で橋の経営を長年支えた佐藤清右衛門は、郷土の発展になくてはならないこの新しい橋の完成を、心から喜んでいることでしょう。

隈共社記念碑（神明社）

佐藤 清右衛門

佐藤 清右衛門は、文久元（一八六一）年、現在の丸森町舘矢間に生まれた。「隈共社」という会社に入り、阿武隈川両岸を結ぶ舟橋の経営に携わった。度重なる水害や修理で経営が難しくなったが、多くの私財を投じた後、あきらめずに橋を守った。この橋は、清右衛門の死後（宮城県が舟橋の管理を引き受け）鉄橋に姿を変え、現在「丸森橋」として地域交通の要となっている。

１０１人

☆　調べた人物についてまとめてみましょう。
　○　レポートにまとめる　　○　年表にまとめる　　○　新聞にまとめる
　◎　自分が書きとめたメモやカードをもとにしてまとめ方を工夫してみましょう。

東　部　エ　リ　ア

江戸時代

◎大槻　俊斎（天然痘の治療）
◎秀ノ山　雷五郎（相撲　横綱）
山内　甚之丞（養蚕技術の普及）
◎川村　孫兵衛重吉（北上川の改修）
鈴木　勘右衛門（上水道の整備）

明治・大正時代

◎落合　直文（歌人　国文学者）
鈴木　哲朗（遠洋漁業の近代化）
◎フランク　安田（イヌイット民族の指導者）
◎内海　五郎兵衛（北上川への架橋）
菊地　雄治（塩竈港の築港工事）
遊佐　快真（塩竈港の築港工事）

昭和時代

伊東　信雄（多賀城跡の発掘）
小野寺　久幸（国宝の保存・修理）
杉村　惇（画家）
畠山　重篤（環境教育）
青木　存義（東京音楽学校教授）
小野　末吉（へき地医療）
後藤　桃水（民謡研究家）
高橋　英吉（彫刻家）

仙　台　市　エ　リ　ア

江戸時代

◎青柳　文蔵（図書館の開設）
◎伊達　政宗（仙台藩　藩祖）
◎林　子平（海防　海国兵談）
工藤　平助（海防　赤蝦夷風説考）
谷風　梶之助（相撲　横綱）
◎酒井　げん（髪結いの名人）
玉蟲　佐太夫（奥羽越列藩同盟）

明治・大正時代

◎大槻　磐渓（藩校『養賢堂』学頭）
齋藤　善右衛門（教育事業）
多田　等観（仏教学者）
◎富田　鐵之助（日本銀行初代副総裁）
◎本多　光太郎（物理学者　鉄鋼の父）
太田　連二（医師　黄熱病対策）
小野　喜代子（女優　新聞記者）
◎一力　健治郎（新聞社の創立）
沼倉　吉兵衛（仙台白菜の開発）
長尾　四郎右衛門（生出村村長）
◎大槻　文彦（辞書『言海』作成）
川村　幸八（サツマイモの栽培）
◎志賀　潔（赤痢菌の発見）
◎土井　晩翠（荒城の月の作詞者）

昭和時代

石田　名香雄（東北大学総長）
安彦　ひさ子（福祉事業）
鈴木　碧（童謡詩人）
野副　鉄男（化学者）
福井　文彦（音楽家）
井上　ひさし（作家）
大坂　鷹司（児童福祉）
高橋　功（陸軍軍医）
芳賀　佐五郎（堤人形作り）
山田　富也（福祉施設の設置）
阿部　次郎（哲学者　美学者）
梅原　猛（哲学者）
末永　喜三（稲の品種改良）
西澤　潤一（半導体研究）
針生　乾馬（陶芸家　堤焼）

みやぎの先人

☆　自分が興味をもった人物をもっとくわしく調べてみましょう。
- ○　自分が住んでいる地域で活躍した人物
- ◎　図書室やインターネットで調べる。
- ○　興味をもった分野で活躍した人物
- ◎　博物館や資料館，現地に実物を見に行く。

北部エリア

江戸時代

◎芦東山（近代刑法思想）
◎慶念（児童福祉の祖）
菅原屋篤平治（慈善事業）

明治・大正時代

◎及川甚三郎（実業家）
遠藤速雄（農村画家）
◎鎌田三之助（品井沼干拓）
及川平治（自由主義教育）
永澤才吉（浄水施設の建設）
千葉あやの（藍染工芸家）
◎二階堂トクヨ（日本女子体育大学創立）
吉野作造（民本主義）
千葉卓三郎（五日市憲法草案）
◎佐々木君五郎（江合川の治水）
加藤きん（看護婦）

昭和時代

石ノ森章太郎（漫画家）
齋藤眞（脳神経外科医）
佐藤忠良（彫刻芸術）
白鳥省吾（詩人　校歌の作詞）
三神泉（光学天体望遠鏡の開発）

南部エリア

江戸時代

◎河村瑞賢（海運と治水）
◎片平観平（蔵本大堰改修工事）
◎支倉常長（慶長遣欧使節団）

明治・大正時代

尾形安平（鉄道普及の努力）
大砲萬右衛門（相撲　横綱）
◎佐藤清右衛門（丸森橋架橋）
◎櫻井喜吉（医師　無料診療）
◎高山開治郎（一目千本桜の植樹）
高橋勝蔵（洋画家）
真柳善四郎（亘理吉田村初代村長）
◎高山善右衛門（角田上水の建設）
毛利萬之介（角田の農業の向上）
目黒平治（へき地教育の向上）
小野さつき（尋常高等小学校訓導）
安田忠平（亘理吉田村の開墾事業）

昭和時代

谷津はつね（助産婦）
大槻文平（日経連会長）
大沼萬兵衛（澄川用水）
遠藤忠雄（白石和紙）
久板栄二郎（劇作家　脚本家）
小室達（彫刻家）
佐藤忠太郎（和紙伝統工芸）
佐藤基（医師 インシュリンの発見）
只野文哉（電子顕微鏡開発）
鈴木正夫（民謡歌手）
三宅義信（重量挙げ選手）
丹野丹治（用水路開拓）

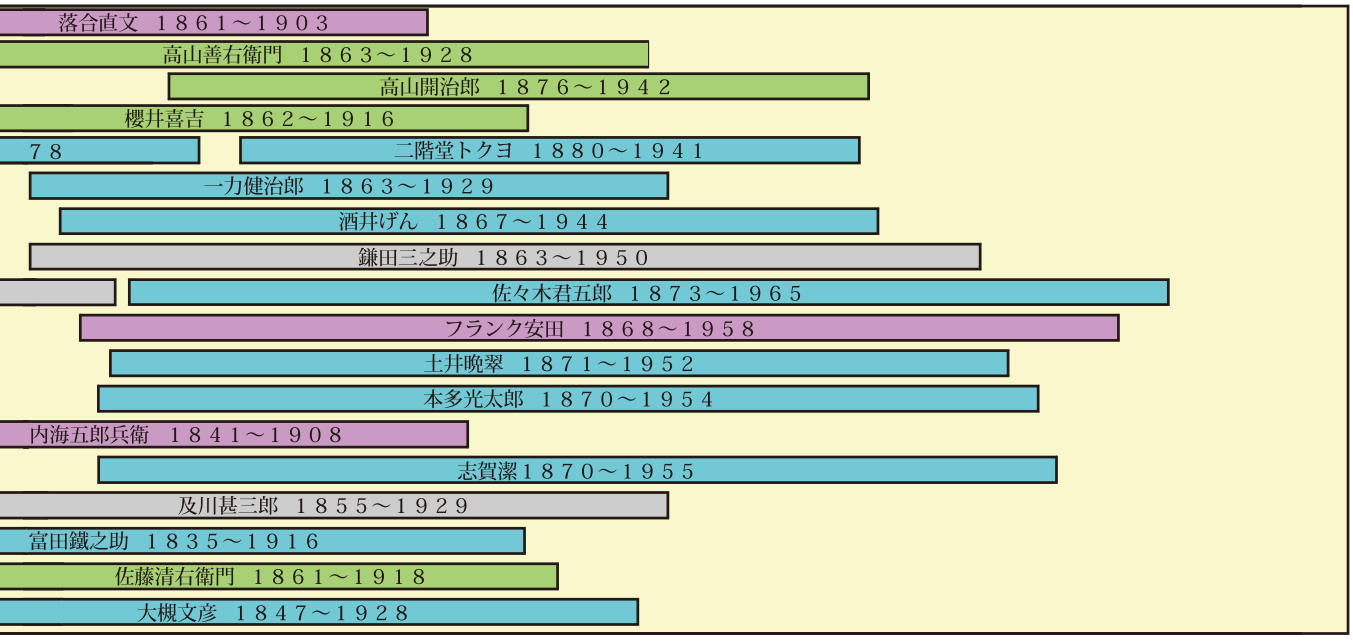
明治からの世の中　戦後の新しい世の中

明治時代　大正時代　昭和時代

1900

一九七八　日中平和友好条約が結ばれる
一九七二　沖縄が日本に復帰する
一九七二　札幌冬季オリンピック開催
一九六四　東京オリンピック開催
一九五六　国際連合に加盟する
一九五一　日米安全保障条約を結ぶ
一九五一　サンフランシスコ平和条約を結ぶ
一九四六　日本国憲法が公布される
一九四五　広島・長崎に原子爆弾が落とされる
一九四一　太平洋戦争（～四五）
一九三七　日中戦争（～四五）
一九三三　日本が国際連盟を脱退する
一九三一　満州事変が起こる
一九二五　普通選挙制度が定められる
一九二三　関東大震災が起こる
一九一〇　韓国併合が行われる
一九〇四　日露戦争（～〇五）
一八九四　日清戦争（～九五）
一八九〇　第一回帝国議会が開かれる
一八八九　大日本帝国憲法が発布される
一八七七　西南戦争が起こる
一八七三　地租改正が行われる
一八七三　徴兵令が出される
一八七二　学制が公布される
一八七一　藩が廃止され県が置かれる
一八六八　明治維新江戸を東京とする

一九七八　宮城県沖地震発生
一九六五　八木山動物公園開設
一九六〇　チリ地震津波が三陸沿岸を襲う
一九四九　仙台市名誉市民となる
一九四九　本多光太郎、志賀潔、土井晩翠が被災戸数 一一六四二戸、死者九一一人
一九四五　仙台市がアメリカ空軍の空襲を受ける
一九三七　本多光太郎が第一回文化勲章を受賞
一九三四　東北地方は大冷害となり、凶作となる
一九二九　気仙沼町に大火、焼失戸数 九〇二戸
一九二七　高山開治郎が五〇〇本の桜を白石川に植樹
一九二三　高山開治郎が七〇〇本の桜を白石川に植樹
一九一九　仙台市に大火、焼失戸数 六八九戸
一九一七　本多光太郎がKS磁石鋼を発明する
一九一〇　鎌田三之助が品井沼の排水路を完成させる
一九〇七　高山善右衛門が角田用水を完成させる
一九〇五　東北地方大凶作となる
一八九七　一力健治郎が河北新報を創業
一八九六　三陸沿岸に大津波
一八九三　櫻井喜吉が船迫に無料日曜診療所を開設する
一八八二　内海五郎兵衛が北上川に橋をかける
一八七九　第一回宮城県議会開催
一八七八　第七十七銀行開設
一八七二　仙台県を宮城県とする
一八七一　仙台藩を廃し仙台県をおく
一八六八　奥羽越列藩同盟結成



先人が生きた時代

時代：武士の世の中／江戸時代

年：1600　1700　1800

日本の主なできごと

一五九〇　豊臣秀吉が全国を統一する

一六〇〇　関ヶ原の戦いが起こる

一六〇三　徳川家康が江戸に幕府を開く

一六一五　豊臣氏がほろびる（大坂夏の陣）

一六一五　武家諸法度が定められる

一六三五　参勤交代の制度が確立される

一六三七　島原・天草一揆が起こる

一六四一　鎖国が完成する

一七七四　杉田玄白らが「解体新書」を出版

一七九八　本居宣長が「古事記伝」をあらわす

一八二一　伊能忠敬の日本地図が完成する

一八三七　大塩平八郎の乱が起こる

一八三七　百姓一揆と打ちこわしがたびたび起こる

一八三三　天保の大ききん（～三九）

一八五三　ペリーが浦賀に来る

一八五四　日米和親条約を結ぶ

一八五八　日米修好通商条約を結ぶ

一八六七　徳川慶喜が政権を朝廷に返す

宮城の主なできごと

一六〇〇　伊達政宗が仙台城の築城を開始

一六一三　支倉常長がヨーロッパに向け月浦を出発

一六一五　支倉常長が法王パウロ五世に謁見

一六二三　川村孫兵衛重吉が北上川改修工事に着手

一六六七　河村瑞賢が東廻り航路を拓く

一六七〇八　仙台城下に大火、焼失戸数　二一三五戸

一七二七　仙台城下に大火、焼失戸数　一五二五戸

一七三六　仙台藩が養賢堂をつくる

一七五二　仙台城下に大火、焼失戸数　一五二七戸

一七七六　仙台城下に大火、焼失戸数　一五五三戸

一七八三　ききんのため多くの死者が出る

一七八六　林子平「海国兵談」を刊行

一八三〇　片平観平が隧道工事に着手

一八三一　青柳文蔵が仙台藩に蔵書や資金を提供

一八三六　東北地方が大ききんとなる

宮城の先人（先人集に登場する人物）

伊達政宗　1567～1636

支倉常長　1571～1622

川村孫兵衛重吉　1575～1648

河村瑞賢　1618～1699

林子平　1738～1793

芦東山　1696～1776

青柳文蔵　1761～1839

片平観平　1770～1841

大槻磐渓　1801～18

大槻俊斎　1806～1862

慶念　1820～1871

秀ノ山雷五郎　1808～1862

【監　修】
横山　利弘（前関西学院大学　教授）　相澤　秀夫（宮城教育大学教職大学院　教授）

【アドバイザー（50音順・敬称略）】
工藤　昌明　澁谷　榮昭　中山　一弥　堀　努　松尾　隆治

【作成委員（50音順・敬称略）】

阿部　陽介	加藤えり子	佐藤　修二	高野　貴美	三浦　祐子
一條　美奈	加藤　浩二	佐藤　博昭	髙橋　宏典	村田富美子
大友　賢	狩野　孝信	佐藤美紀子	中川美津子	柳生　育恵
大友　孝	鹿野　征美	神野　真理	成瀬　聡	山田　明実
大西　守	小林　伸一	鈴木　一道	樋口　英明	横山　高行
大沼あゆみ	西城　敏幸	髙砂　宏之	三浦　竜樹	和田　祐子
糟谷　明洋	佐藤　秀二			

【協力者・団体（50音順・敬称略）】

阿部　和夫	大槻　慧	日下　右門	齋藤　良治	佐々木治樹
鮎貝　文子	川村　貞之	日下　龍生	酒井　愛子	千葉　宗久
荒木　英夫	菊池　徳夫	斎藤　善之	坂本　和正	

芦東山記念館	角田市郷土資料館	普誓寺（石巻市）
芦東山先生顕彰会	学校法人北里研究所 北里柴三郎記念室	フランク安田友の会
石巻市立湊小学校	学校法人二階堂学園 日本女子体育大学	公益財団法人 本多記念会
一関市教育委員会	河北新報社	宮城県慶長使節船ミュージアム
一関市博物館	鎌田三之助記念館	宮城県仙台第一高等学校
一関市松川公民館	仙台市博物館	みやぎ登米カナダ友の会
一般財団法人佐々君治山報恩会	仙台文学館	涌谷町産業振興課商工観光室
大河原町中央公民館	東京教育研究所	亘理町立郷土資料館
大河原町さくらの会	日本銀行	各市町村教育委員会

【題　字】 髙橋　仁（宮城県教育委員会　教育長）

デザイン・印刷 /（株）ドルック東北